

## 第二章

### 盛唐詩研究

## 第一節 李白「静夜思」の構造

### はじめに

現在まで広く愛好者をもつ唐詩の中で、もつとも親しまれているのは、どの作品であろうか。ただ一首のみを挙げるとしたならば、われわれは困惑しつつも杜甫の「春望」あたりを頭に浮かべるであろう。しかし、中国の人々にとってそれは杜甫の代表作のひとつであるに過ぎない。過日、必要があつて、唐詩の中から任意の一首を引用して論ずることを求めたところ、ひとりの中国人の留学生が李白の「静夜思」を選んで答案を作成していた。中国の人々にとって杜甫はすぐれて尊敬さるべき詩人であるが、もつとも愛されるのは李白であるという「セオリー」を確認した次第である。日本と中国の人々に共通していちばん親しまれている唐の詩といえば、この作品あたりになるのであろうか。

ところが、千年ものあいだ人々の心に生きつづけてきたこの詩の、核心ともいふべき重要な問題に、読者たち、とりわけて近來の中国の人々は無頓着であるようだ。以下この僅か二十字の短い詩に蔵された無限の広がりと二字の異同との関わりについて考察したい。

唐代における最大の樂府作家である李白の作品の中で、「靜夜思」は伝統的な樂府題の繼承あるいは古樂府の再興という分野とは違い、新興の樂府すなわち唐代に入って作られた新しい樂府題による作品である。宋の郭茂倩による『樂府詩集』卷九十の「新樂府辭」に分類される「靜夜思」の樂府題のもとに置かれているのは李白のこの一首のみであり、したがって李白の創作した樂府題であるといつてよい。即ち、「未だ必ずしも金石に被らざる」<sup>おんがく</sup>「唐世の新歌」なのであり、歌謠風の雰囲気をもった、しかしながら必ずしも伝統の枠にとられぬ五言絶句である。もつとも、韻律の面では近体詩の規範をかなり逸脱したところがあり、王力の『漢語詩律学』の五言絶句の項において「全篇古体」(四六四頁)の例として掲げられるように、所謂「拗黏・拗對」の詩である。明の胡應麟が、その著『詩藪』の中で「太白の五七言絶、字字神境、篇篇神物なり」と称しつつも、「太白の五言、『靜夜思』『玉階怨』等、古今に絶妙たり、然れども亦た齊梁の体格なり」というのは、韻律面での風格をも問題にしているであろう。

わが国における唐詩の鑑賞は、明の李攀龍の撰という『唐詩選』にその多くを負っている。この「靜夜思」も五絶の一として採られているが、その序に「五七言絶句の如きに至りては、實に唐二百年一人のみ。蓋し意を用いざる(不用意)を以つてこれを得たり。」<sup>1</sup>と言ひ、李白を唐代随一の絶句作者と称賛している。服部南郭は、その講述記録『唐詩選國字解』において、「なぜ李白がよいなれば、思案功夫せず不図意にうかむま、に口に出るにまかせて、作たゆへ、格別にできて、他人がまねることもならぬ。」と述べるが、武部利男氏はさらに「李白は絶句にかけては唐代三百年の第一人者であるが、その秘訣は『不用意』ということだ、『心に

思惟せず』『ふと云ひ出し』て作つたゆえに、彼自身も自覚しないうちに『自然の妙境』に達したのであって、技巧をこらした作品はかえつて失敗している、というのである。そして、この『静夜思』が『意を用いないで』出来た詩であるという。」と敷衍している。これら三者の評は、結局のところ古典詩に対する最高の賛辞として用いられるところの「羚羊 角を掛く、跡を求む可きなし」（嚴羽『滄浪詩話』）の語にも置き換えることができるであろうが、森槐南もこの詩について、「物静かな夜の感情に浮かびました事を、其儘に寫しました處に、妙が在る」と言う。このように、各時代の人々が「神境」といい「不用意」といい「天機」といい、さまざまな評語を用いて賞揚する。しかし、その神韻の由つて来るところはこの詩のどこに蔵されているのだろうか。それを分析することは容易ではないが、いまここに少しく考察の手を加えてみたい。

牀前看月光 牀前月光を看る

疑是地上霜 疑ふらくは是れ地上の霜かと

舉頭望山月 頭を挙げて山月を望み

低頭思故郷 頭を低れて故郷を思ふ

樂府というジャンルは、ひとくちに言えば歌謡文学であつて、漢代以来の樂府詩はおおむね樂曲歌辭を受け継ぎ、そのいわば「替え歌」として作られるものであるが、実際には樂曲から離れ、その本歌の雰圍氣を詩に詠ずるものも多い。李白が、一旦途絶えてしまった樂府題により、新たに作品を制することで古樂府を再興したことは知られる。しかし、この「静夜思」は、樂府題「有所思」「秋夜長」「夜坐吟」などの類似を感じさせつつも、それらのいづれとも異なり、李白が自由に発想し創り出した樂府題である。彼の樂府「秋思」など

と軌を一にするものと言つてよいであろう。<sup>③</sup>

「静かなる秋の夜にも思う」というモチーフは、単に樂府文学のみならず唐以前の詩作品において数多く用いられている。元の蕭士贇はこの「静夜思」に注して、古詩十九首の「明月何皎皎 照我羅牀幃」蘇武詩「征夫懷遠路 遊子戀故鄉」および曹丕の雜詩「俯視清水波 仰看明月光」鬱鬱多悲思 縣縣思故鄉」など、いずれも『文選』の卷二九に「雜詩」として分類される詩句を引く。中国古典詩における「雜詩」は、単見によれば「孤独である人、ないしやがて孤独になろうとしている人」の独白としての性格をもつ。<sup>④</sup>そして、「静夜思」に見える「秋の夜」「月」「もの思い」という設定は、そのような文学に「付きもの」の舞台装置でもあった。

#### 牀前看月光

「牀前」とは「ベッドの前」の意である。蕭士贇の引く「古詩十九首」其十九は先の句に次いで、「憂愁不能寐 攬衣起徘徊」という。夫を思うこの詩の話者 (speaker) が、憂愁のためにまんじりともせず、ついに衣をとって歩き回る。その寝台のカーテンを明月が照らすというパターンは、その後の幾多の詩歌に受け継がれる。そのうちもつとも重要な作品が、阮籍の「詠懷」第一首である。古詩十九首の世界と異なり、「夜中不能寐 起座彈鳴琴」で始まる有名な第一首は、民歌の様相を払拭し、完全に知識人の内面世界の憂愁を担っている。真夜中に眠れないでいるのは、夫を思う女性ではなく、琴の音色に己れの人格を天に問う士人であり、「薄幃鑑明月 清風以我衿」の句における「明月」および「清風」は、きわめて象徴化された表象であって、つきつめて言えば、それらは造物者が琴の音に応えそれらを嘉する声なのである。「徘徊將何見 憂思獨傷心」と

いう結びには、下敷きになった右の古詩の憂愁やそれにとまなう徘徊と全く違った沈思の世界が構築されている。そして、阮籍から遠く下った唐代の詩人である王維の「竹里館」や李白のこの絶句に、今度はそれらの詩の世界が投影されているのである。

このような詩の世界の流れを意識してであろうか、吉川幸次郎氏は、『新唐詩選』（岩波新書）の中で次のようにいう。

もはや牀の上に横たわってよい時間である。しかし静かな夜のもの思いにふける人は、じつと立っている。あるいはそのへんを徘徊している。そうして「頭を擧げては山月を望み、頭を低れては故郷を思つて」いる。

（傍点森瀬）

漢詩あるいは魏詩の世界ではこのようなシチュエーションにおいて「徘徊」ないし「彷徨」という語はほとんど「付きもの」であると言えよう。だが、李白のこの詩では、「看る」という動詞が用いられている。辞書によれば「看、視也」とある。視線を定めてながめているというこの動作は、けっして立ったり、ましてあちこち歩き回ったりする所作を連想させるものではない。「独り坐す」状態こそが、「看」の一字の中に暗黙のうちに織り込まれていると言つてよいであろう。

疑是地上霜

この句は前句を承けて、月の光に白く照らされた床が、見つめているうちにそれが恰も降り敷かれた地上の霜に見えてくる錯覚を表す。「疑是」という言葉は、単にひとつの比喩として「まるで霜のようだ」といつているのではなく、この詩の話者にとって床の白さが月の光なのか降りた霜なのか不分明になった心理状態を表

しているのである。そのことは、第三句への移行に際して重要な契機となっている。そして、同時にこの詩に設定された「時」が霜の降るような厳しい寒さにつつまれた深更であることを暗示している。

### 擧頭望山月

元のひとつ楊載の詩話『詩法家數』の「絶句」の項に次のような語がある。

絶句の法、……第三句を以つて主となし、而して第四句これを発す。……大抵 起承の二句、固より難し、然れども、平直に叙起するを佳となし、従容としてこれを承くるを是となすに過ぎず。宛転変化の工夫の如きに至りては、全て第三句に在り。若し此に於て転変好を得れば、則ち第四句は順流の舟の如し。

要するに、絶句においては第三句こそが眼目なのであり、転句の変化の妙を得れば全体が完成したも同然であるといふのである。楊載の卓抜なコメントは、李白のこの「静夜思」の第三句に対するそれとしても十分な説得力をもつ。

「静夜思」一首の関鍵は、ひとつには第二句から第三句に移る行間に存在するといえる。第二句でこの詩の話者は、第一句の月光の白さが霜のそれではないかと疑念をいだき、思わず知らずそれを目で追って確かめようとす。うつむいて長い間見つめていた床の上から、視線は降りそそぐ月光の流れに沿って静かに昇ってゆき、部屋の中から戸外へ移り、天空に上り、山上の月へと達する。そして、そこに明月の輝きを見て心にひとつの安らぎを得る。第三句の「擧頭」とはこの過程を表すのではなく、視線が月に達したのちの状態をいうのである。したがって、承句から転句への行間にこそ右の視線の動きは「描写」されていると言えるのである。

「言外の意」という言葉がある。宋の司馬光の『温公詩話』は、杜甫の「春望」冒頭の「國破山河在 城春

草木深」の上句に関して、「人事無し」の意が「言外」に在ると説く。李白のこの詩の行間に秘められた右の「描写」は、これと対照的に墨の芸術における空白の美にも似て、豊かな「叙述」を秘めている。

### 低頭思故郷

「低頭」は、前句の「擧頭」と同様「結果」である。したがって第三句と第四句との間には、一定の時間の経過が予想されるが、今度は第二句と第三句の間にあつたような「描写」は組み込まれていない。月を見て得た安堵感がやがてひとつの感慨へと推移してゆく。そして、気づいてみれば首うなだれてもの思いに耽つていくという、心理の移ろいとゆつくりした時間の経過とが暗示されているのである。

ところで、この詩の「故郷を思う」という言葉にはどんな意味合いが含まれているのだろうか。先に挙げた曹丕の「雜詩」においても「仰いで明月の光を見る」の句から「縣縣として故郷を思う」の句に至るまでにはいくつかの句があり、「月光」と「故郷を思う」こととは、李白の「靜夜思」の場合のように直截に結びついてはいない。しかし、李白という詩人にとって、「月」は特別の位置を占めている。この詩のような樂府詩においては話者 (Speaker) は必ずしも作者 (author) と同一たりえないが、あえて李白に即して言うならば、彼にとつて月は一生の友であつた。アンデルセンの『絵のない絵本』の主人公のように、彼は生涯を通じて月に語りかけ、酒の相手とし、月を「君」と呼んでいる。そこから、峨眉山など古里蜀における青少年期の記憶を読み取りうるし、嫦娥伝説などに見られる再生不滅の月に対する「信仰」を指摘することもできよう。ただ、それらはこの詩の深層に潜む海底の珊瑚たるにすぎない。

この詩は確かに「永遠」を読むものに感じさせるが、それは決して月という表象に依存するのではない。か



りにこの詩が李白の個人的な感慨に終始するオケイジヨナルなものとしてのみ作られていたとしたら、あるいは時代的制約の強い觀念に寄り掛かった詩であつたならば、これほど広範な読者を得ることはできなかつたに違いない。

「故郷」という言葉は唐詩において「故園」「郷関」など同義の言葉とともに多く用いられているが、李白の場合その使用例は少ないと言えるであろう。「但使主人能醉客 不知何處是他郷」(客中行)というボヘミアンの李白であつてみれば、旅と孤独は酒や月とともに一生の伴侶であつた。ありきたりの望郷の感傷など無縁のものであつたと思われる。むしろ、作品が作者から離れて鑑賞されるとき、受け取りかたとしてそのようなセンチメントを許容する輿行きは十分にもつた詩であるのだが。

かつて作家井伏鱒二は、この詩を翻案して、

ネマノウチカラフト気ガツケバ

霜カトオモフイイ月アカリ

ノキバノ月ヲミルニツケ

ザイシヨノコトガ気ニカカル

とうたつた。

この小唄調の名詩は、最初「ネドコニユクトキイイ月ガ出テ／庭ニ置イタル霜カトミエタ／ノキバノ月ヲミテイルト／ヒトリ妻子ニアタマガサガル」と草されたという。そして、武部氏は、この第四句と翻案詩にコメントして次のようにいう。<sup>6)</sup>

(李白の用いる「故郷」という言葉には) 李白の故郷である四川の方角を示すと見られるものは、四例にとどまり、その他は、特にどこをさすかは明らかでない。また、かつて井伏鱒二が訳したように、ヒトリ妻子ニアタマガサガルと読めるかどうか。李白に即していえば甚だあやしい。

たしかに、武部氏のいうごとく李白が故郷の妻子をしのぶものと解せるかどうか疑わしい。氏もいうように「彼(李白)には、第一、妻子をおもう詩が少ない」のである。詩中の話者が月を見て家族をしのぶというモチーフは、井伏鱒二の翻案詩においてわれわれに深い感動を与えるが、それは井伏の体験に即しつつ、日本人の感性に訴えるべく選ばれた言葉だからであり、必ずしも李白の原詩の本意ではない。それだけに限定してしまふとこの詩の奥行きは中国古典詩として浅いものになってしまう。

近年の中国における唐詩鑑賞出版物のベストセラー『唐詩小札』<sup>1)</sup>の中で、著者劉逸生は述べる。

彼は往年まだ古里に住んでいたころ、明月を見た。月光が部屋の中まで射しこんでくるのを見たことがあった。さらに、ふとそれは地上に降りた霜ではないかと思つたことがあつた。それは彼の脳裏に深く深く刻まれた。いま年をとつてしまひ、古里を離れてはいるが、しかし、やはり明月であり、地上に降りそそぐ月光である。この一刹那、古里の往時のことがゆくりなくも心に浮かび、まるで目の前に見るように彷彿する。つまり、「故郷を思う」とは、そのひとの心の原点に立ち戻ることにはかならない。記憶の深い層のなかから、すでに忘れ去っていた記憶がありありと甦ってくるのである。意識が自己以外の他者や他所へ移ろいゆくのではなくて自己の意識の深い層へと回帰してゆくのである。したがって、作者李白に即していうならば、「故郷」は峨眉山でもよいし、あるいは長安であつてもかまわないのである。そして、この詩の読者は詩中の人物を通じて自己の心を観照することになるのである。

ところで、この詩には何かしら「永遠」を感じさせるものがあると言った。それは詩の深さ自体からくるものであるのだが、短い詩句の中にひとつの「仕掛け」が蔵されてもいるのである。

結論を先に言えば、その最大の眼目は、第四句が第一句に回帰するところにある。すなわち、結句において、「頭を低れ」るひとの目は当然のこととして床に落ちる。それは、「故郷を思う」ひとの長い長い沈思の時を導く。そうして凝視する目は、ふたたび第一句の「牀前看月光」にたちかえる。かくして、この詩は永遠に終わることのない孤独と沈思の世界にひとびとを誘い込む。この構造こそが、絶句の特質である聯綿として絶えることのない抒情を「静夜思」独特のものとしているのである。先の楊載の文は、また次のようにいう。

絶句の法、婉曲回環し、蕪を刪り簡に就き、句絶えて意絶えざるを要す。

この言葉は「静夜思」を規範として述べられたと言つてよいほどであり、右の事情こそ李白のこの詩が「神韻」と称せられる所以であるともいえるのである。

こんにち中国の人々が賞玩する「静夜思」は、先に掲げたものとやや文を異にする。

牀前明月光

疑是地上霜

舉頭望明月

低頭思故郷

第一句の「看月光」を「明月光」に、第三句の「望山月」を「望明月」に作る文を用いているのである。第

一句に「明月光」とするのは清朝の王士禛の『唐人萬首絶句選』などであり、第三句において「望明月」につくるのは、明万曆年間に趙宦光らが修訂した『萬首唐人絶句』に始まる。バートン・ワトソン氏による英訳でも「Moonlight in front of my bed……」と首句を訳しているから前者に従っているのであり、欧米のひとびとにもこれらの文の影響が及んでいる。

そして、右に示したように「明月」を二度用いているのは、清の乾隆二八年序の蘅塘退士の『唐詩三百首』に見えて、これが中国の人々にもっとも多く用いられている。現今中国で出版される選本の類はすべてこれに依る。先に挙げた劉逸生の『唐詩小札』も同断である。他方、李白の別集の系統のテキストでは、靜嘉堂文庫所蔵の北宋本はじめ元本（蕭本）から清朝の王琦注本まで、総集では『樂府詩集』宋本から明代に流行した選本『唐詩歸』に至るまで、すべて最初に掲げたごとく今日われわれが習知している本文と同じである。

文の異同につき武部氏は、林庚の著『詩人李白』（上海文藝聯合出版社 一九五四年）の影響を指摘している。林庚は、同著の「李白詩選」の末尾に附註を施しておよそ次のようにいう。

蕭本では、第三字の『明』を『看』につくり、第十四字の『明』を『山』につくる。しかし、洪邁の『萬首唐人絶句』では、第十四字を『明』につくっている。洪邁の方が蕭士贇よりも約百年も早いから、蕭本は信じがたい。おそらく二箇所とも『明』であったのを蕭本が改めたのであろう。

これはとんでもない謬説であって、以後の研究者がそれに従ったとは思えない。なぜなら、林氏の書が出た翌年の一九五五年に文學古籍刊行社から洪邁の『萬首唐人絶句』の嘉靖刊本の影印が出版されている。そこに採録される『靜夜思』は、篇題詩句とも別集のそれとまったく同一であって「看月光」「望山月」に作るの

ある。しかし前記のように明の万曆末趙宦光らによって修訂された『萬首唐人絶句』では第三句を「望明月」に改竄している。林氏はこれを洪邁の文と誤認したのであらう。

それではいったい、この二字の異同が詩全体にどのような影響を及ぼすであらうか。ここで改めて前章で考察した事情を振り返ってみると、それらの二字は決して無視できないどころか詩の構造の根本にかかわる問題を含んでいることがわかる。まず第一句について言えば、「明月光」に作るのは、多分先に示した蕭士贇の注が引く曹丕の雑詩の「仰看明月光」なる句と関わっているであらうが、「明るい月の光が目の前にある」という事柄自体は、「看月光」でも「明月光」でもそれほど差はないと思われる。この異同に関して中国の人々はあるいは「差不多」と言うかも知れない。また、わが国にも「明月光」の文を善しとする人がいるかも知れない。しかしながら、「牀前明月光」の文は、「牀前看月光」の文に比べて動詞を用いないために話者の主体が引っ込んで外物の客観的な描写となり、穏やかな文になる。さらには、「明月光」なのか「月光明るし」なのか（第一義的には前者なのだろうが）不分明であり、いささか曖昧になる。そこが良いのだという考えも成り立ち得る。だが、「看る」という動詞は前述したように、第四句から第一句へと文脈が回帰するについて不可欠な一語である。繰り返すことになるが、第四句で「頭を低れて」「故郷を思う」という。ここで、うなだれて人生の来し方を見つめるとき、そのときの話者の姿が、第一句の「牀前に月光を見つめる」姿に繋がり、そこではじめて「永遠の世界」に読者を誘なう循環が齎らされるのである。「看」という動詞は、読者の深層のイメージに働きかけて、第四句を第一句に結び付ける重要な言葉であると言わなければならない。第一句「看月光」の文は、それゆえ、この回帰循環の構造に思い至らなくなった後世の「さかしら」であると

言えるのではないか。

第三句「望明月」は、これよりも「罪は軽い」といえよう。「望月」でも「山月」でも月をイメージすることに変わりはない。ただ、この場合もやはり前述した「行間の描写」のこの詩における重要さを考えるならば、「山月」の語のもつ重みを指摘しないわけにはいかない。第二句第三句の行間における床から戸外さらに天空へと移る視線の暗示に関し、「山」の譜は月が空高く懸かるさまを引き出すのに大切な働きをしている。「明月」では、この高さの感覚が十分惹起されないとと言える。

それではいったい、何故そのような本文が中国において広まったのであろうか。武部氏は、前述のように林庚のコメントの影響を指摘する。だが、実際のところあの謬説の与えた影響はさほど大きいものではないだろう。林氏以前から、あるいは影響の及ばぬ所でも広くかの文は用いられているのである。

その淵源を探ってみると、どうしても『唐詩三百首』に帰着せざるをえない。清朝の中葉、乾隆年間に蘅塘退士の号のもとに撰せられたこの唐詩選本は、ちょうどわが国における『唐詩選』のごとく、またたく間に一世を風靡する書となった。近人朱自清は、この書の概説たる『唐詩三百首読法指導大概』の中で次のように言う。

『唐詩三百首』は、まったく一般的な選本である。この詩選は非常に有名で、もつとも広く流行し、以前はこの家でも歌い誦された本であったし、いまもなおかなり普遍的な書である。しかしこの選本は決して古典たりえない。それは『古文觀止』同様、当時の童蒙のための書にすぎないのであり、今の小学校の教科書に等しかった。しかしながら、現在の教育制度のもとでは、この本は高校生に読んでやるのにちょうど適

当である。

朱自清の要を得た『指導大概』もよく読まれたらしいが、『唐詩三百首』自体こんにちでも中国の人々の教養の書として読み継がれ誦読されている。政治形態の如何を問わず、事情が同じであるのは、清朝において流行した入門書がそのまま家庭においてあるいは教場において定着し、親から子へ、師から学生へと受け継がれて、教養書として不動の地位を占めるに至ったからである。

清末の思想家であり学者であり官僚であった張之洞に『輶軒語』という手引書がある。四川省の長官として赴任した張之洞が科擧の受験を目指す若い人々に、学問の心構えと方法を懇切に指導した書で、いわば六朝の『顔氏家訓』の清朝版のごとき書であるのだが、そのなかではつきりと「唐詩は宜しく三百首を読むべし」と断じており、注には「三百首は約にして精、宜しく爛熟すべし」と言っている。『唐詩三百首』の選ぶ三百篇は、清朝人の好みそのものであったのであろう。しかしその結果、現在に至るまで『静夜思』について言えば、ここに考察したような「訛した」文を中国の人々は脳裏に刻み込まれてしまうこととなったのである。

近年（一九七八年）上海古籍出版社から『李太白集校注』という李白の文集の校注本が出版された。便利な本であるが、しかしこの書も、宋本、元本をはじめ現存するほとんどのテキストを検討したと称しながら、底本に清朝の王琦の注釈書の文を用いるというような考えられないことを平気でやっている。先年中国の相当な地位と実力をもった、ある唐詩専門家と対談する機会を得て、中国の研究者は李白や李賀のテキストに何故あのように王琦の注本ばかりを尊重するのか尋ねたところ、「清朝人は学がありますから。」というこたえが即座に返ってきた。これは彼の率直な見解であるのだろう。しかしながら、本国人として中国の研究者が古典文学―

ここでは唐詩研究に限って言ってもよいのだが、に新たなペースタイプを拓こうとするならば、清朝の学問を理解しつつも、他方でそれを一度清算してかかることが不可欠ではなからうか。ある中国人の若い研究者にこの『静夜思』の問題についての右の卑見を披瀝したところ、柔軟な頭脳をもつその人は、私の考えに全面的に賛同を示したが、こと清朝の学の再検討ということには否定的であった。理由を尋ねると「師承の問題がありますから。」という言葉が返ってきた。

## 注

- (1) 武部利男「李白の『静夜思』について」(『吉川博士退休記念論集』一九六八年)
- (2) 森槐南『李詩講義』(一九一三年)
- (3) 『唐詩別裁』、『唐詩三百首』などが篇題を「夜思」とするのは、これに合わせたものであろう。
- (4) 附論第二節参照
- (5) 岩波新書『新唐詩選』(一九五二年初版発行)
- (6) 武部利男「李白における月の比喩」(『入矢教授小川教授退休記念論集』一九七四年)
- (7) 劉逸生『唐詩小札』(一九六一年広東人民出版社初版発行)「静夜思」は増訂版で加えられた。  
 詩人看到明月、引起对故郷的懷念。這是通過一種聯想。他是在早年還居住在故郷的時候看過一輪明月、看過月光照進屋子裡、并且曾經忽然產生過地下結了霜的懷疑。印象深深印在自己的腦子裡。如今雖然年紀大了、也已不在故郷、可是還是一輪明月、還是地上反照的月光。在這一刹那間、故郷的往事突然涌上心頭、而且恍如歷歷在目。懷郷的感情給強烈地撥動了。

(8) Burton Watson 『The Columbia book of Chinese poetry』(New York 1984)



## 第二節 李白「靜夜思」本文の異同

### はじめに

前節において、李白「靜夜思」一首を考察した。(以下「前稿」)その骨子は、

- 一、第一句「牀前看月光」の「看」という動詞(および第三句の「山月」の語)がこの詩の關鍵であること。
- 二、にもかかわらず現在中国の人々が採用して疑われないのは、第一句第三句に「明月」を繰り返す文であり、それは清朝の唐詩選本『唐詩三百首』流行の弊風余波であること。

この二点であった。

そして、同稿において、この「明月」の語を最初に本文に採用(つまり改竄)したのは、明の万曆年間に刊行された『萬首唐人絶句』であり、二句にわたって採用したのは『唐詩三百首』であろうと推定しておいた。前稿執筆時、李攀龍『唐詩選』については、通行本を用いていたので気づかなかつたのだが、のちに万曆刊李攀龍編蔣一葵注『廣註唐詩選』の本文が、『唐詩三百首』に先駆けて二句にわたり「明月」の文を用いていることに気づいた。<sup>①</sup>これは、今日我が国で多く読まれているすべての『唐詩選』とその本文を異にするものである。前稿に述べたごとく、明代以前のテキスト、即ち宋刊本の『樂府詩集』<sup>②</sup>のような総集、『萬首唐人絶句』<sup>③</sup>(嘉靖刊本)のような選本、さらに北宋本『李太白文集』<sup>④</sup>をはじめとするすべての別集中に「明月」の語を本文に見出だしうるものは皆無である。そこで、明刊唐詩選本を中心に李白「靜夜思」を収めるものなかで、その

異同を検討してみた。「明月」を「静夜思」の本文として用いたものが『唐詩選』以外にあるか、その本文を諸本につき追ってみたわけである。そして、現在までに管見に入ったのは次のとおりである。中には本国においてすでに佚亡してしまったものも含まれると見られるいっぽう、我が国において行われている『唐詩選』の性格を考える必要もあり、煩瑣を承知で列挙しておく。

## 一

A 「牀前看月光 疑是地上霜 舉頭望山月 低頭思故郷」に作るものには次の諸本がある。

○『萬首唐人絶句』宋洪邁編一百一卷

嘉靖十九年序刊本∥蓬左文庫蔵（前稿に示した一九五五年文學古籍刊行社影印本と同一のものと思われる。

「静夜思」は卷一に掲載。）

○『唐詩品彙』明高棟編九十卷拾遺十卷

嘉靖十六年序刊本内閣文庫・静嘉堂文庫・東京大學東洋文化研究所・京都大學東洋學文獻センター等蔵（『四庫全書総目提要』（以下『四庫提要』）は、鄭際唐家蔵本として記す。卷三十九卷に掲載。）

○『雅音會編』明康麟編十二卷

天順七年序嘉靖刊本∥内閣文庫蔵（『四庫提要』は内府蔵本の一として記し、「亦た楊士宏『唐音』の例に沿い、發明する所なし」と評する。卷九に掲載。）

○『唐詩正聲』明高棟編二十二卷

成化十七年序刊本Ⅱ蓬左文庫藏（他に東京大學東洋文化研究所蔵六卷本、内閣文庫蔵嘉靖三年序刊十卷本および享保十四年刊和刻本など多くの版があるが、「静夜思」の本文に異同はない。）

○『唐音類選』明黄佐編二十四卷拾遺一卷清康熙四十九年刊本Ⅱ内閣文庫蔵（黄佐は字才伯、香山の人。『明史』卷二八七に伝がある。嘉靖四十五年没。卷十九に掲載。）

○『全唐風雅』明黄應麟編二十八卷

萬曆二年刊本Ⅱ蓬左文庫蔵（五六六卷、五律五卷、五言排律二卷、五絶二卷、七古五卷、七律三卷、七絶四卷、七言排律一卷から成る。五絶の卷一に掲載。）

○『唐詩紀』明呉瑄編（盛唐）百十卷

萬曆十三年序刊本Ⅱ蓬左文庫蔵（『四庫提要』に内府蔵本の一として記す。呉瑄は、隆慶五年の進士。馮惟訥の『古詩紀』にならったが、盛唐までで、後半未刊。内閣文庫蔵本（一部分後印）尊經閣文庫蔵のものも同版と思われる。『四庫提要』は「一家の書に非ず」と評する。盛唐第六十七卷に掲載。）

○『唐詩所』明臧懋循編四十七卷

萬曆三十四年序刊本Ⅱ蓬左文庫蔵（『四庫提要』は通行本として記す。同版と思われる内閣文庫蔵二部がある。『詩所』十二卷附録一卷萬曆三十一年序刊本Ⅱ東京大學東洋文化研究所蔵の続篇。尊經閣文庫蔵四十七卷は清康熙刊本である。卷七に掲載。）

○『古今詩刪』明李攀龍編三十四卷

明刊本Ⅱ静嘉堂文庫蔵（『四庫提要』に江蘇巡撫採進本の一として記し、「流俗の行うところなり。別に攀龍『唐詩選』有り、攀龍實はこの書なし。乃ち明末坊賈『詩刪』中の唐詩を取り、加うるに評註を以ってし、

別に斯の名を立つ。」と断ずる。しかし、『唐詩選』がそのように単純にこの書から抄出したものでないことは既に論ぜられるところである。なお、静嘉堂文庫所蔵の版では、卷二十に掲載し、第二句を「疑是池上霜」に作る。尊經閣文庫所蔵の李攀龍『詩刪』二十三卷は、朱墨套印で罫は無く、版を異にし、後掲のごとく第三句については文を異にしている。寛保二年刊和刻本が行われているが、これも校訂が施されていて、文はやはり別集のものと同じである。）

○『唐詩歸』明鍾惺・譚元春編三十六卷

萬曆刊本Ⅱ内閣文庫蔵・東京大學東洋文化研究所蔵・尊經閣文庫蔵・神戸市立図書館吉川文庫蔵などの三十六卷本のほかに、尊經閣文庫蔵萬曆刊三色套印本・静嘉堂文庫に三十卷明刊本・清刊本がある。『四庫提要』には内府蔵本の一として記す。三十六卷本の卷十六に掲載。）

○『唐樂府』明呉勉學編十八卷

明刊本Ⅱ内閣文庫蔵（『四庫提要』に兩江総督採進本の一として記す。やはり、宋郭茂倩『樂府詩集』から抜粋したものである。卷十六に掲載。）

○『唐詩解』明唐汝詢編五十卷附一卷

萬曆四十三年序刊本および順治十六年刊本Ⅱ内閣文庫蔵（この書も『唐詩選』との関わりが云々される。『四庫提要』に通行本として記され、「是の書、高廷禮（棟）『唐詩正聲』、李于鱗（攀龍）『唐詩選』二書より取り、稍々訂正を爲し、附するに己れの意を以てこれが箋釋と爲す」という。この卷二十一に掲載する「静夜思」は別集と同じものだが、後述のごとく清朝に入ってから改訂を施した『刪訂唐詩解』では第三句に「明月」の文を用いる。）

○『彙編唐詩十集』明唐汝詢編四十一卷目錄一卷

天啓三年序刊本∥蓬左文庫藏（内閣文庫蔵本も同版。甲集五絶の項に掲載。）

○『唐雅同聲』明毛懋宗編五十卷

崇禎六年序刊本∥靜嘉堂文庫藏（押韻と詩体の別によつて唐詩を分類しており、卷三十六下平陽韻五言絶句の項に掲載する。）

○『刪補唐詩選脉箋釋會通評林』明周敬編六十卷

崇禎八年序刊本∥尊經閣文庫藏（『四庫提要』に通行本として記し、「高棟『品彙』、李攀龍『詩刪』を宗と爲す」と云い、「大抵 多を貪り博ならんと務め、冗雜特に甚しく、疎舛また多し」と評する。盛唐五絶の項に掲載し、圈点を施すが、第一句「看」第二句「疑」第四句「郷」の各字に二重圈点を加えている。）

○『石倉十二代詩選』明曹學佺編五百六卷

崇禎四年序刊本∥蓬左文庫藏（上代から明までの詩を集大成しようとした膨大な書。『四庫提要』は浙江巡撫採進本の一として「石倉歴代詩選」の名で記すものの「其の（明詩の）三集以下の存せざること正に亦た惜しむに足らず」と云い、完本を見ていないが、蓬左文庫および尊經閣文庫所蔵のものは明詩六集一百卷までを揃えている。唐詩百十卷の第三十一巻に掲載。）

○『唐詩選感遇』明孫慎行編六卷

明刊本∥尊經閣文庫藏（『唐詩選紀述』二巻『贊美詩雜論』とともに合冊されている。巻一に掲載。）

●『唐詩選』明李攀龍編服部元喬（南郭）校

（原刊本は享保九年刊というが、未見。以後高山房ほか各地で数多く重刊翻刻され、我が国で唐詩を読むと

言えはこの書を読むことを意味したほど隆盛を極めた。しかし、服部南郭自身序文の結びに「原本諸刊、頗る多し、……如し字に異あらば多く原本の尤も善き者に従い、両ながら可にて裁し難ければ、則ち『品彙』『詩刪』『詩解』『十集』に就きて之を考へ、其の多くして且つ正なる者に従ふ」と述べているように、本文にかなり手を入れている。その最たるものがこの「静夜思」であつて、後掲の明刊李攀龍『唐詩選』および同系列の本文が採用する「明月」の語を第一句第三句から排して右記四集に共通する本来の文に戻しているのである。卷六に掲載。）

●『唐詩選掌故』千葉玄之撰七卷

寛政五年刊本Ⅱ静嘉堂文庫蔵（服部南郭の『唐詩選』で当てた江戸の高山房の刊。卷六に掲載。）

●『箋釋唐詩選』明李攀龍編戸崎允明注

天明四年刊本Ⅱ静嘉堂文庫蔵（やはり高山房刊。独自に校訂しているように称しているが、「静夜思」は服部南郭と同じ本文を用いている。卷六に掲載。）

●『唐詩選』明李攀龍編神野世猷校七卷

江戸末刊本Ⅱ内閣文庫蔵（卷六に掲載。第一句のみ、頭注において「看一作明」とする。これは恐らく明刊本『唐詩選』により校校したのではなく、後述の森大来『唐詩選評選』と同じ事情によるものであろう。）

一一

B 「牀前看月光 疑是地上霜 舉頭望明月 低頭思故郷」につくるものには次の諸本がある。

○『宋洪魏公進萬首唐人絕句』宋洪邁原本明黃習遠竄補趙宦光校四十卷

萬曆三十五年序刊本Ⅱ京都大學東洋學文獻センター蔵(内閣文庫所蔵の四十卷本二部も同版と思われる。『四庫提要』は内府蔵本の一として、九十一卷と称し、「此の本 是の修補の後に當りて、復た又た散佚せしなり」と云うのみで、この萬曆修本については言及していない。黃習遠の萬曆三十五年の跋文中に「我が嘉靖庚子に迨び、陳中丞(振孫)重校してこれを梓す。然れども其の訛を正す者有るなし」と云い、趙宦光の萬曆三十四年の題詞にも、「暇日 靈岩の詩人黃伯傳(習遠)と与に悉く厘正を爲し、其の十に一を削る。皆な前失なり」とある。これらの文からすると、「靜夜思」の第三句の「山」を「明」に竄したのは黃習遠と趙宦光が共同して行つたごとくである。『李于鱗唐詩選』が大流行して十年ほどを経た頃の校訂と思われるが、『唐詩選』の影響というよりは尊經閣本『詩刪』の文に倣つたものとすべきかも知れない。一九八三年に書目文獻出版社から排印本が、翌年同社から索引が出されている。卷三に掲載。)

○『詩刪』明李攀龍編二十三卷明刊本Ⅱ尊經閣文庫蔵(巽なく朱墨套印本であり、靜嘉堂所蔵の三十四卷本とはまったく版を異にする。『北京圖書館古籍善本書目』<sup>(5)</sup>においては、三十四卷本の方を後段に置く。卷二十一に掲載。)

○『刪訂唐詩解』明唐汝詢編清吳昌祺評定二十四卷  
清康熙四十年序刊本Ⅱ内閣文庫蔵(原本の歌行など長詩を削つて、かなり改竄している。第三句に「明」字を用いるのは、やはり『詩刪』の影響であろうか。卷十一に掲載。)

C 「牀前明月光 疑是地上霜 舉頭望明月 低頭思故郷」につくるものには次の諸本がある。

○『箋釋唐詩選』明李攀龍編蔣一葵注七卷附一卷

萬曆二十一年序刊本Ⅱ内閣文庫蔵（本学内藤文庫所蔵のもの（口絵図版1参照）と異なり写刻体。『四庫提要』は内府蔵本の一として記し、次のように言う。「唐詩選」七卷 舊本『明李攀龍編唐汝詢註蔣一葵直解』と題す。…攀龍選する所の歴代の詩、もと『詩刪』と名づく。此れ乃ち其の選する所の唐詩を摘す。汝詢も亦た『唐詩解』有り。此れ乃ち其の註を割きて取る。みな坊賈の爲せし所なり。疑うらくは蔣一葵の直解も亦た名を託せしならん。然れども今に至るまで郷塾の間に盛行するは、亦た異とすべきなり」と。注目したのは「至今盛行郷塾間」という語である。これはのちの『唐詩三百首』と全くその性格を同じくする、つまり、「当時の童蒙の書にすぎず、今の小学校の教科書に等しかった」（朱自清『唐詩三百首讀法指導大概』）ということである。この版の書品から見ても、それは十分に首肯しうるものである。その巻六に掲載する「静夜思」の本文に「明月」を二度用いる文を採用するものひとつには、そういった書物の性格から来るのである。第二章第一節参照）

○『鄒庵重訂李于鱗唐詩選』明李攀龍編蔣一葵注七卷 崇禎序刊本Ⅱ内閣文庫蔵（『李攀龍唐詩選』の爆発的流行を示す諸版のひとつ。黄家鼎（鄒庵）の評を加える。巻六に掲載。）

○『唐詩選彙解』明李攀龍編徐震校七卷首一卷

明刊本・内閣文庫蔵（右と同種の書。同じく巻六に掲載。）



○『唐詩合選』明李攀龍編鍾惺同輯明蔣一葵箋釋劉化蘭增訂六卷

明刊本Ⅱ東京大學東洋文化研究所蔵（この書も『李于鱗唐詩選』系列の一であり、本文もそれを襲っていて巻六に掲載。封面には、「李于鱗先生唐詩合選鍾伯敬譚友夏両先生評選」とある。<sup>6)</sup>）

○『鍾伯敬評註唐詩選』明李攀龍編鍾惺注七卷附一卷

明刊本Ⅱ内閣文庫蔵（巻七闕本）（鍾序のほか劉孔敦と王穉登の序を付す。同じく巻六に掲載するが、第一句に「一作看月」第三句に「一作山月」の傍注を施している。これは興味深いものがある。すなわち、注釈者は本来の文との異同を認識しながらも服部南郭のように本文を改めることをせず、注にとどめているのであって、「明月」を一度用いる文が『李于鱗唐詩選』の「売りもの」のひとつであったことを示唆していると言えよう。）

○『李于鱗唐詩廣選』明凌弘憲編七卷

明刊本Ⅱ内閣文庫蔵（『四庫提要』に内府蔵本の一として記し、「宏憲また其の評點なきを病とす。乃ち諸家の評を雜撫し、簡端に掇り、朱墨を以てこれを版印し、題を此の名に改む。蓋し坊刻翻新の技のみ」と云う。「俗書」とされるこの系列の中で、その書品の高さは刮目すべきものがあり、同じ版の尊經閣文庫所蔵の本とともに樟腦を漉き込んだ美麗な套印本である。弘憲が呉興の凌氏であるのは、凌濛初の序が付されていることから判る。やはり巻六に掲載。）

○『李于鱗先生唐詩選平』清葉弘勛撰七卷清康熙元年序刊本Ⅱ東京大學東洋文化研究所蔵（内閣文庫所蔵のもの）は康熙六一年の序である。第一句「牀頭」に作る。のちさらに潘稼堂評の『唐詩選平箋註』Ⅱ東洋文庫蔵が出てゐる。巻六に掲載。）

○『呉註唐詩選』明李攀龍編清呉山註七卷

清刊本Ⅱ内閣文庫蔵（この書も、頭注に、「首句一作看月光、第三句作望山月」とする。巻六に掲載。）

#### 四

D 「牀前明月光 疑是地上霜 舉頭望山月 低頭思故郷」につくるもの。（いずれも清朝に入ってから以後のテキストであるから、参考までに一二を示すにとどめる。）

○『唐詩別裁集』清沈徳潜編二十卷

（巻十九に掲載する。篇題を「夜思」と改竄していて、それは『唐詩三百首』に引き継がれる。）

○『唐宋詩醇』清高宗編五十八卷

（乾隆帝御選のよく知られた選本である。康熙帝の『御選唐詩』が「静夜思」（巻二十七）について本来の文を採用しているのと異なっているのは沈徳潜の影響であろうか。巻四に掲載。）

●『唐詩選評選』森大来（槐南）著

明治二十九年郁文舎刊（槐南による李攀龍『唐詩選』の評釈であるが、彼は何故かこの文を用いている。恐らく右二書の影響であろう。かくして、「明月」を二句にわたって使用する文は我が国では受け容れられることはなかったのである。）

以上、調査したテキスト・エディションを列挙してみた。なお、この他にも明刊本あるいは明以前の唐詩選

本は多く現存している。「静夜思」一首をその集中に見出し得なかつたものを参考までに左に示しておく。

- 『王荊公唐百家詩選』 宋王安石編二十卷
- 『唐詩絕句』 宋趙蕃・韓流編謝枋得注五卷（内閣文庫藏林羅山手校江戸写本。なお注6参照。）
- 『千家詩選』 宋劉克莊編二十二卷（内閣文庫藏清刊本Ⅱ卷十七～二十二闕本。天保九年の官版はこの本に訓点を施して翻刻したものである。）
- 『唐音』 元楊士弘編十六卷（蓬左文庫藏覆洪武二十三年建安博文堂刊本朝鮮刊本。ほかに嘉靖刊湖北先正遺書本、享和二年刊和刻本がある。）
- 『唐詩正音』 元楊士弘編六卷（内閣文庫藏朝鮮刊本）
- 『重選唐音大成』 明郝天和編十五卷首一卷（内閣文庫藏嘉靖五年序刊本）
- 『苑詩類選』 明包節編王交校三十卷（蓬左文庫藏嘉靖二十五年序刊本）
- 『唐詩類鈔』 明顧應祥編八卷付一卷（内閣文庫藏嘉靖三十一年跋刊本）
- 『詩家全體』 明李之用編十四卷（内閣文庫藏萬曆二十六年跋刊本）
- 『詩體明辯』 明徐師曾編二十六卷（内閣文庫藏崇禎十三年刊）
- 『簪箋唐詩絕句精選』 明胡次焱編五卷（内閣文庫藏明刊本）
- 『新刻名公批評分門唐詩雋』 明孫鑛編三卷（内閣文庫藏明刊本）

## 五

明刊本あるいは明以前の唐詩選本はこれ以外にも存在するであろうが（例えば『唐詩鼓吹』のような律詩のみの選本や別集を集めた選集は省略した）、一応右の調査に拠る限り、次のような結論が暫定的に下せるものと思われる。

一、李白「静夜思」の本文は、明李攀龍の編として世に出された『詩刪』（尊經閣本）あるいは『唐詩選』以前には、「明月」を用いる本文は存在していない。

二、明末から清初にかけて刊行された李于鱗『唐詩選』系列の諸本はすべて「明月」の語を第一句第三句に用いている。

三、「明月」を二度用いる文は、李于鱗『唐詩選』から清朝の『唐詩三百首』に引き継がれた。

四、我が国における李攀龍『唐詩選』は、翻刻に際して服部南郭が他の選本に拠って「静夜思」本来の文に戻したものをを用い、以後ほとんどすべての版本注釈書に引き継がれた。

右の結論および前掲の調査結果は、李白の「静夜思」一首という狭い「切り口」で明刊本を中心とする唐詩選本を切ってみた、いわば「断層写真」である。このひとつの断層面を観察することにより、多くの先人が議論してきたもうひとつの問題に新たな視座が得られるのではないだろうか。それは、李攀龍『唐詩選』という書の成り立ちの問題である。

あれほど流行した『李于鱗唐詩選』を偽書と決めつけたのは、言うまでもなく『四庫提要』であった。「舊

本題明李攀龍編」として、その編者の名を削ったことは知られる。市河寛齋は、その著『談唐詩選』の中で偽書説を認めつつも、『古今詩刪』に見えぬ詩が多数『唐詩選』に収められることから、両者の関連を否定した。平野彦次郎氏は、それらの説に反駁し、『四庫提要』とは逆に『唐詩選』を増補して、誰かが『古今詩刪』を編纂したのだと主張し、『唐詩選』は『唐詩品彙』から詩を抽出したものであると結論づけている。<sup>⑧</sup>花房英樹氏は、「五千八百首に近い詩篇を載せる『唐詩品彙』から、この『唐詩選』の、一定の傾向をもつ『四百六十五首』を抜き出すことは、是非はともかくとして、一つの見識がなくてはかなわぬことに思い到った。その後、機會あるごとに資料に目をとどめているうち、平野説を積極的に否定することは、なかなかできにくいことと知った<sup>⑨</sup>」と言う。また、『唐詩選』『古今詩刪』双方に共通の「原詩抄」を想定する説もある。<sup>⑩</sup>これらの推定作業は、概ね『四庫提要』や選本に付された序文などの検討、さらに詩篇の出入りを突き合わせることによって為されている。そして、「文章は改められやすい<sup>⑪</sup>」として、詩の本文の異同を論ずることは少ない。前野直彬氏は「唐詩選の底本について」と題する文の中で本文の検討を『唐詩選』『古今詩刪』『唐詩品彙』三本の五古・七古詩二十五例について試みていて、ひとつの傾向は示唆しているが『唐詩選』の成り立ちを明確に示すところまではいっていない。しかしながら、右に見たように「明月」を二度用いる本文が、万暦刊の『李攀龍唐詩選』から、清朝に入って異同がはっきりと意識されたのちまで、その系列諸本において不変であるということは、『唐詩選』という選本の性格が、それ以前の、篇幅が大きく逆に発行部数の少ない選本諸本とは異なった世界を構築し伝承していることを物語っている。

およそ選本を新たに編輯する場合、単純に大部な書から抽出したり既刊の書に水増ししたりするのみで成功するであろうか。『唐詩選』のような選本が世に出されるときには、ひとつの商品としてのコンセプトが強く

打ち出されるはずである。選本というものは、概ね既に読み知られている作品を集めるだけのものであるゆえに、出版のたびに篇題が変えられたり、本文が改竄されたり、ときには作者さえも変更されることがあるのである。その中で、よく知られた詩の本文が明らかでない改変を受け、それが各種の改訂増補を経ながら受け継がれ再改変されないのは、明らかに『唐詩選』が世に出た時から、読者の間に一種の伝承にも似た了解が成立していたからであると思われる。このような読まれ方は、数十巻あるいはそれ以上の篇幅をもつ従来の選本ではありえないことである。

さらに、中国においては、『唐詩選』以前の諸本に「明月」の語がなく、『唐詩選』以後の選本諸本に「明月」を用いない本がきわめて少ないことは、本文の異同というものが決して恣意的に行われ、改変再改変されるのではないことを証明している。本文の変化異同には、時間の流れに沿った一定の不可逆的な過程が存在しているとも言えるのである。つまり、李攀龍『唐詩選』で用いられた「静夜思」の本文は、おそらく私塾の師弟の間で読まれ、その大流行とともに中国全土に同様な読者層を掘り起こして行つたのであろう。やがて他の選本（例えば『萬首唐人絶句』）の改訂に際して影響を与え、清朝に入ると新たな選本の編輯（例えば『唐詩別裁』）に影を投げかけ、康熙帝『御選唐詩』のような例外はあるものの、『唐詩三百首』というさらにコンパクトに纏められた選本により、この「明月」を二度用いる文が再度定着するや、本来の「看月光」「望山月」の文は中国の人々の脳裏からほぼ完全に消え去つたのであつた。かの愈樾ですら、その随筆『湖樓筆談』のなかで「明月」を重ねる本文を引用して、「牀前明月光、初以爲地上之霜耳、乃舉頭而見明月、則低頭而思故鄉矣。」と敷衍する。かくして、現在中国の人々は専門の研究者を含め誰もが、本来「明月」を二度用いる文であつたと信じて疑わない状況を現出するに至つたのである。<sup>13</sup> 清の王雲翼（堯衢）は、「本に『看月光』に作る。『看』の字

は誤り。もし『看』の字を用うれば則ち『望』の字、何の力か有らん」と評する。この自己撞着的な言説の裏には、『唐詩選』から『唐詩三百首』に至る読者層に共通する近世的な詩文観が横たわっているように思える。前稿に述べた回帰循環の構造は忘れられ、「明月」と「頭」の二語を短い詩形の中で繰り返す単調さを顧みず、「看」という動詞による主体の表出を忌む、一種硬直した詩文観が底流に存在していて、唐詩（とくに李白詩）のもつ精緻さと奥深さはみごとに捨象されてしまっているのである。

## 六

ところで、『唐詩選』の成り立ちの問題に戻ると、「明月」の語の「出自」に関して、少々厄介な問題が残る。いうのは、右に述べたごとく李攀龍の編に成る『古今詩刪』においては「静夜思」の本文に版本による異同がある。すなわち、尊経閣本の『詩刪』巻二十一では「明月」を第三句に含む文であるのに対して、三十四巻本『古今詩刪』巻二十に収める「静夜思」の文は「明月」を含まない本来のものなのである。

『北京圖書館古籍善本書目』集部（二七六二頁）には、「詩刪十卷明李攀龍輯鍾惺譚元春評明刊套印本一冊」とする本を、「古今詩刪三十四巻目錄二卷明汪時元刊本二十四冊」とする本の前に置く。尊経閣本はおそらく前者と、静嘉堂本は後者と同一もしくは同系統の版本と思われる。ひとまず尊経閣本を原本あるいはそれに近いものと見て、前述のように結論づけておいたが、必ずしも三十四巻本の方が後のものであると断ずることはできない。李攀龍が「明月」を第三句に取り入れたものを、間もないうちにもとに戻す改訂をするということは、不自然だからである。

いずれにしても、花房英樹氏の言の、「李氏の没後、ほど遠からぬ萬曆の中葉に、その名で行われた事實に紛れもない。とすれば、たとえ李氏の周囲で編纂されたとしても、一應は李氏の編著として、差支えないではなからうか。」<sup>(16)</sup>という枠内の問題ではあるのだが。李攀龍の『唐詩選』に付いては附論第三節で考察する。

黄仁宇はその著『万曆十五年』を、次のようなことばで結んでいる。

一五八七年は、万曆十五年、干支は丁亥の年である。見た目には天下太平で、記すべきことはないようだが、実際は、我らが帝国は、すでに発展の行きどまりに来ていた。こういうときには、皇帝が治世に励もうが快樂に耽ろうが（中略）文官が正直に勤めようが貪欲にのさばろうが、思想家が極端に革新しようが保守にこだわろうが、とどのつまりは、みな善悪の別なく、どれもこれも事業に有意義な発展を得られぬものである。あるものは地位を失い、あるものは名誉を失い、あるものは両方とも失った。<sup>(17)</sup>

『唐詩選』という書物は、まさしくこの時期に大流行したのであり、李白の「静夜思」の本文も、この書によつて八百年後に改竄され、それ以後、清朝考証学の隆盛を経ても、中国ではもはや本来の文に立ち戻る機会を完全に失ってしまったのである。

## 注

(1) 林庚氏は『詩人李白』の『李白詩選』の附註で、李攀龍『唐詩選』と明刊塾本『千家詩』が「明月」を二度用いる文を採用していると指摘している。

(2) 『樂府詩集』（北京文學古籍刊行社用宋本影印 一九五五年）



- (3) 『萬首唐人絶句』(北京文學古籍刊行社用嘉靖刊本影印 一九五五年)
- (4) 京都大學人文科学研究所影印靜嘉堂藏宋刊本『李太白文集』(「李白の作品」Ⅱ唐代研究のしをり所収)
- (5) 『北京圖書館古籍善本書目』(北京圖書館編書目文獻出版社 一九八七年)
- (6) 『内閣文庫漢籍目録』(二三八七頁)に『唐詩合選』二卷宋謝枋得選注明刊(雨花齋)とあるのは誤記で、なかみは『唐詩絶句』宋趙蕃・韓流編謝枋得注の刊本である。
- (7) 元の范德機の撰と称する詩話『木天禁語』に引く「静夜思」は「明月」を二度用いる。しかし『四庫提要』はこの書に「舊本題」の語を付し、偽書とする。こんにち我々が目睹しうるのは、清の何文煥の『歴代詩話』に収められるものに過ぎない。
- (8) 平野彦次郎「李于鱗『唐詩選』は果たして偽書なりや」(『支那學研究』第二編のち『唐詩選研究』一九七四年明德出版社刊に収める。)
- (9) 花房英樹 書評「前野直彬注解『唐詩選』岩波文庫」(『中國文學報』第十八冊 一九六三年)
- (10) 山岸共「唐詩選の實態と偽書說批判」(『日本中國學會報』第三十一集 一九七九年)
- (11) 山岸氏前掲論文
- (12) 前野直彬「唐詩選の底本について」(『書誌學』四 一九六六年)
- (13) 瞿蛻園・朱金城『李白集校注』(上海古籍出版社 一九八〇年)は「各本李集均作看月光、唐人萬首亦作看月光。王士禎唐人萬首絶句選及唐詩別裁均作明月光、疑爲士禎所臆改。」とのみいう。
- (14) 清王雲翼註『唐詩合解箋註』(蓬左文庫藏 光緒刊本)
- (15) 「看」の字は、『廣韻』においては上平声二十五寒韻に属して「視也」とあり、又音が去声二十八翰韻に見える。そして唐代では普通平声が用いられたが、後代去声が用いられるようになった。松浦友久氏の御教示によれば「静夜思」第一句三字目を仄声にするのは、絶句古体の韻律を破り近体の韻律に化するので「明」の字が用いられたのである。

(16) 花房英樹氏前掲書評

(17) 黄仁宇『万曆十五年』(稲畑耕一郎他訳 一九八九年東方書店刊 原著は一九八一年イエール大学出版局刊)

【補注】

倉缺主編『李白全集校注彙釋集評』(百花文藝出版社刊 一九九六年)第二冊九〇二頁の「静夜思」の「備考」には、南京で一九九〇年に行われたシンポジウムで発表した際の拙稿「關於李白静夜思」(『唐代文學研究』第三輯 廣西師範大學出版社 一九九二年)を紹介する。しかし、同書の注釈には、そこで述べたこと、および本節で論じた事情は全く意識されていない。

### 第三節 杜甫の立場

#### はじめに

中国文学史において、ひとりの文学者の評価乃至イメージというものは、時代とともに断えず移り変わるものである半面、それとは反対に、歴史の流れの中で定着してしまつた価値観が、既成概念となつて、時代を越えて君臨し、大きな流れの中で存続しつづけるということもある。中華人民共和国成立後、よく「愛国詩人」という評語が使用された。無論、それはイデオロギーと戦争に明け暮れた時代性から必然的に導き出された価値基準であつたのだが、この語を以て評される古典文学の作者は、そのほとんどがかつて「忠」の語を以て称されていたことを忘れてはならない。

杜甫は「詩聖」と称された。李白を「詩仙」と呼び、道教徒詩人として人々が親しむのに対して、「詩聖」という賛辞は、儒教的な精神の模範となるべき詩人という意味合いをもつ。例えば、明初の朱椿（蜀献王）は、「祭杜子美文」の中で、「予の羨うところのものは、蓋し先生一飯の頃をも、忠君愛国の惓惓たるを以てし、其の巫峡を出で、湘川を下ると雖も、固より此に恋恋とせずして、先生の精神なお水の地に在るごとく、往きて在らざる所なければなり」という。この言葉には蘇軾の文の影響が伺われる。東坡は、「王定國詩集叙」の中で、「古今詩人衆し。而して杜子美首たり。あに其の流落飢寒して、終身用いられざるも、一飯も未だ嘗て君を忘れざるを以てするにあらずや」という。東坡のこの文はまた次の文に続くものである。「もし夫れ情に

発して、忠孝に止まれば、其の詩あに同日にして語るべけんや。」<sup>②</sup>

また、詞人として知られる秦觀も、その「韓愈論」の中で、「孟子曰く、伯夷は聖の清なるものなり。……孔子は聖の時なる者なり。孔子これを集大成と謂う。嗚呼杜氏韓氏もまた詩文の大成を集したる者か」<sup>③</sup>という。杜甫が「詩聖」として措定されるのは、韓柳の古文が顕彰され流行する時期とほぼ重なりと言つてよいであろう。たしかに、「載道文学」の典型たる韓愈その人が、杜甫を高く評価していたことは周知のとおりである。「李杜文章在、光燄萬丈長」（調張籍）や「昔年因讀李白杜甫詩、長恨二人不相從」（醉留東野）、「高揖羣公謝名譽、遠追甫白感至誠」（酬司門盧四兄雲夫院長望秋作）などの句は、しかしながら、決して君臣倫理の尺度を正面きつて押し出した評価ではなく、李白とつねに並称されているごとく、その文学あるいはせいぜい「至誠」という士人倫理の称揚に止つている。従つて、『集註草堂杜工部詩外集』の附録に韓愈筆と称する「題杜工部墳」<sup>④</sup>は、「英華一旦世俗眼 忠孝萬古賢人芽」とあるところからも、宋代以後の偽托の文としてよいであろう。唐朝の人々は、韓愈に限らず楊巨源にしろ孟郊にしろ白居易にしろ皮日休にしろ、杜甫を「狂」の名をもつて称することはあつても、「忠」の名を冠することはない。それは至極当然のことであつて、本朝の人物について「忠」をもつて称するには、それなりの臣下としての勲功がなくてはならない。一方、他朝の文学者について論ずる場合は、自ずと作品中の言辞が中心になるからである。

このように、宋代に「詩聖」として奉られた杜甫という詩人のイメージは、基本的に変更されることのないままに現在に至つていふと言つてよいであろう。たしかに、杜甫は玄宗皇帝の即位とほとんど時を同じくして生を享け、一生のあいだ「まるで恋人のように慕い続けた。そして、彼の詩文の中には多くの天子や皇室に言及した言葉が見られる。それらの言辞が後世をして「忠」の名で呼ばしめる原動力になつてゐるのだが、彼

の「赤心」は疑いのないものとしても、その裏側に潜む重要な一面が等閑視されているのではないだろうか。

## 一

杜甫は現存する詩作品一千四百五十余首の中、ざっと拾いあげてみただけで百五十首ほどの詩篇において、国家または君主に言及する。およそ十首に一首の割合である。これは決して少ない数ではないが、その生涯の中で、それらは平均して分布している訳ではない。天子あるいは皇室ないし国家について言及した詩篇がもっとも多く作られたのは、大暦二年（七六七年）夔州滞在の年であり、これに次ぐのが、至徳二載（七五七年）左拾遺任官の年および大暦元年（七六六年）やはり夔州に主として滞在した時期である。要するに、夔州寓居の二年ほどの間に、後世「詩聖」の名をもって称せられる因となった作品の大半が作られたと言つてよい。「秋興八首」はじめ、後世高く評価される作品もこの時期に集中している。

杜甫は自らを、晋の杜預の子孫として誇らしげに位置づける。彼の名である「甫」も恐らく杜預の字の「世甫」から取られたものである。幼少のころから文才をもって天子に仕え、国家を支える人物たるべき志をもつていたことは疑いえない。私見では、杜甫の制作時期は「秦州雜詩」を最大の分岐点として大きく二つに分かれ、さらに前半は安祿山の乱を境に二分され、後半は離蜀を期に二分される。先に述べたように君主や国家に直接言及する言辞が大暦二年に集中することは興味深い。つまり、杜甫の詩が、詩聖として忠君の面を後世称賛される契機となる作品は、概ね晩年の流浪中のものであって、唐朝の中枢に曲りなりにでも近づいていた時期の作品を中心とするものではないのである。

無論、戦乱以前の作に皇室や天子に言及したものもある。例えば「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」は天宝八載（七四九年）三十八歳のときの作であるが、東都洛陽郊外の墓地北邙山に立つ玄元皇帝すなわち老子の廟に詣でた時の作である。唐室がその祖とする老子を祀ったこの廟は、開元二十九年（七四一年）両京諸州に玄元皇帝廟を置かせた際に建てられたものであろうが、呉生即ち呉道子の筆になる歴代の皇帝の壁画があった。広い意味で題画詩のひとつであるこの五言排律において、杜甫は歴代皇帝の画像を、

五聖聯龍褒 五聖龍褒をつらね

千官列鴈行 千官 鴈行つらなる

と描写する。そして、今上皇帝たる玄宗については、

世家遺舊史 世家旧史にもるるも

道德付今王 道德今王に付す

と、老子『道德經』に玄宗が御注（『御注道德真經』『御製道德真經疏』）を施したことを述べるが、「今王」という呼称には、英明な君主に対する親しみの情は感得せられるものの、大曆二年の作、「柳司馬至」の句、

霜天到宮闕 霜天宮闕に到らんとし

戀主寸心明 主を恋ひて寸心明なり

のような、激しい希求は覗われない。長安を遠く離れて流浪の境遇にあるという、天宝年間との環境の違いがあるのはいうまでもないのだが、杜甫の天宝年間における詩篇の中には、それだけでなく、明らかに晩期の作には決して現われない唐室に対する一定の批判ないし危惧の念を見出すことが出来る。

「兵車行」に、

邊庭流血成海水 辺庭流血海水と成るも

武皇開邊意未已 武皇開邊の意未だやまず

とあるのは、明らかに漢武帝を仮称した玄宗への諷諭であり、後年の杜甫の詩作品では考えられないことである。

さらに、「同諸公登慈恩寺塔」の句、

廻首叫虞舜 首を廻らして虞舜に叫べば

蒼梧雲正愁 蒼梧 雲正に愁ふ

惜哉瑶池飲 惜しいかな瑶池の飲

日晏崑崙丘 日は晏し崑崙の丘

には、天宝十一載（七五二年）の社会不安とその根源に位置する玄宗の楊貴妃への惑溺が暗示されている。後年の作、「解悶十二首其九」において、

先帝貴妃今寂寞 先帝貴妃いま寂寞

芳枝還復入長安 芳枝ふたたび長安に入る

と、一種の甘美な追憶として描かれるのとは、対蹠的である。前半期に科挙受験に失敗しつつも、いずれ唐朝の有為の人とならんとして、胸張って朝廷や今上皇帝の諷諭を志し、あるいは玄宗の内外に射す暗い影を見逃がさずに詠じた杜甫が、後年に至って回顧と悔恨の悲哀の中で皇帝と皇室を思慕賛美し続けることとなる事情の裏側には、唐朝自体の動揺や杜甫の出仕と左遷、そして流浪という内外の激動が存在していることはいまでもない。しかしながら、先述したような「忠」を以て称される杜甫の帝室希求の言辞の裏側には、それ以外

何ものも介在していないであろうか。

一一

杜甫の祖父審言は、彼とこの世に生を同じくはしていない。杜審言は中宗の景龍二年（七〇八年）に没しており、杜甫が生れたのはその四年後の玄宗が即位した先天元年（七一二年）である。しかしながら、杜甫自身「唐故范陽太君虞氏墓誌」を著しており、祖父審言の後を嗣ぐものとして、継祖母の墓誌を書いているのであって、その祖たる晋の杜預を誇らしげに讃えた「祭遠祖當陽君文」とともに、当時杜甫が族望を一身に担っていたことが分る。

杜甫は晩年に至るまで、自己の家系を誇りにする文辞を残している。それが最も正面切つて押し出されているもののひとつに「進鵬賦表」がある。その前半に次の如くいう。

臣甫言、臣之近代陵夷、公侯之貴磨滅、鼎銘之勲不復炤耀於明時。自先君恕預以降、奉儒守官、未墜素業矣。亡祖故尚書膳部員外郎先臣審言、修文於中宗之朝、高視於藏書之府、故天下學士到於今而師之。臣幸賴先臣緒業、自七歲所綴詩筆、向四十載矣。

臣甫言う、臣の近代々陵夷し、公侯の貴磨滅す。鼎銘の勲また明時に炤耀せず。先君恕・預より以降、儒を奉じて官を守り、いまだ素業に墜せず。亡祖故の尚書膳部員外郎先臣審言、文を中宗の朝に修し、藏書の府に高視せらる。故に天下の學士今に到るもこれを師とす。臣幸に先臣の緒業により、七歳より詩筆を綴る所、四十載に向んとす。



この文は、杜甫二十九才の天宝九載長安で書かれ、玄宗に献ぜられたと思われるが、無論無視された。ここで杜甫は、文の冒頭から当時の、文をもって仕える官職を批判し、自らが杜甫の子孫であり、杜審言の孫であり、幼小にして文才があつて四十才になろうとする現在まで千余篇の作品を有すると誇る。天子に文章文才を売りこむ文として、決して上乘とは言えない。極言すれば不遜であるとさえ言える。杜甫に散文の才がないと言われるのも至極当然であろう。ここで注目しておきたいのは、この時点で玄宗皇帝に差し出された上表文という公の場において、杜甫が自らの祖父審言を誇示している点である。それは、一族や友人に示す私的な詩作品ではなく、時の天子百官に対して提示した文なのである。

私的な場では、上元元年（七六〇年）蜀において作られた「贈蜀僧閻丘師兄」において、安樂公主に寵せられた閻丘均の孫なる僧に對して、

吾祖詩冠古 吾が祖 詩は古に冠たり

同年蒙主恩 年を同じくして主恩を蒙る

という。同じ詩に、「惟昔 武皇后、軒に臨みて乾坤を御す。多士尽く儒冠、墨客 雲屯して諂たり。」とあることから、驕横な安樂公主のもとで権柄を得た閻丘均と、武后に氣に入られた杜審言とは、ともに「主恩を蒙る」間柄にあつた<sup>⑦</sup>。それを孫の杜甫が、閻丘均の孫に感慨をもつて語りかけているのである。

この詩は、前述した杜甫の制作時期から言えば、「秦州雜詩」以後の、自らを「野老」と位置づけ、陶淵明ほどの隱逸者として基本的には措定して以後の作であるが、前掲の「進鵬賦表」と同じく、祖父審言が則天武后の朝において取り立てられたことを、臆面もなく誇っている。ここで注意すべきは、贈られた閻丘均の孫が僧籍にあることで、詳しい事情は分らぬながら、彼の置かれた社会的な状況がある程度推測されるといえる。

う。

ところで、蜀滞在中に杜甫はほかに二人の人物に深く思い入れを致した詩篇を残している。ひとりは陳子昂、ひとりは郭元振である。

先ず陳子昂であるが、則天武后の時代に生れ没したこの詩人を、杜甫は生来慕っており、彼が奉じた官職、右衛率府兵曹參軍および左拾遺は、恐らくは陳子昂の官職、右衛曹參軍および右拾遺と関連があるのである。杜甫は、宝応元年（七六二年）冬から翌年にかけて梓州から射洪県に至り、陳子昂の遺跡を訪れ、「冬到金華山觀因得故拾遺陳公草堂遺跡」および「陳拾遺故宅」の二篇を残していて、後者の句を、

終古立忠義 終古 忠義を立つ

感遇有遺篇 感遇 遺篇あり

と結んでいる。同じ詩には、「英俊の人に同遊し、多く輔佐の権を乗る。」の句もある。祖父審言と親友であり、同僚であった関わりをやはり誇示しようとしているのであろう。即ち、陳子昂の「送吉州杜司戸審言序」に、彼が審言を讃えて、「重名天下にあり、而して朝端に独り秀づ。」とあるのを杜甫は意識して「英俊」の語を用いているのかも知れない。左遷され遠地向う審言を送別した陳子昂の文を杜甫は早くから読み、陳子昂という硬骨の詩人に限らない崇敬の念を懐いていたのは確かである。その杜甫が、陳子昂を「忠義」の名を以て称するのは、無論唐朝への忠節を言おうとするに違いないが、先掲の「惟昔武皇后 臨軒御乾坤」（贈蜀僧閻丘師兄）の語から知れるように、則天武后への忠誠に重ねられていることは明らかで、そこには、武周政權が嘗て「革命政權」であり、唐室を危くした政治的党派的意味合いに対する顧慮は少しも感得されない。恐らく、

杜甫にとっては、太宗も高宗も中宗も睿宗も、そして則天武后さえも唐朝歴代の皇位としてしか意識されていなかったのではないだろうか。玄宗と太宗に対する崇敬の念は、むしろ他の皇帝とは別格ではあるのだが、要は武后を祖父が仕えた本朝の実力ある皇位として見ている点の問題なのである。

もうひとり郭震（字元振）である。杜甫は陳子昂の故宅を訪れたのち、梓州から通泉県へと涉り、嘗てここに尉として赴任した郭元振の旧居を訪れた。そして五言十六句から成る古詩「過郭代公故宅」を作っている。史書に「任俠 氣を使い、小節を撥去す」（新唐書卷一二二）というこの人物に対して杜甫は、

羣公有慚色 群公慚色あり

王室無削弱 王室削弱するなし

という。この郭震は玄宗が太平公主を誅するに当って功績があつたが、右の二句はそれを讃えている。彼はのち玄宗の不興を蒙り、斬罪を赦されて流謫の途上病没した。しかし、それ以前彼は十八にして進士に挙げられ、則天武后に「寶劍篇」を上つて嘉せられ、武后はその献策を再三用いている。この詩の結びにも

高詠寶劍篇 高詠す 宝劍篇

神交付冥漠 神交 冥漠に付す

とある。審言と同じく、武后にその文学の才を見出された郭元振に対する杜甫の思い入れが、通泉に足を運ばせ、陳子昂の場合と同じく故宅を訪れ、感慨を吐露せしめたのであろう。

則天武后は、杜甫にとって右に見たように祖父審言の才を認め寵を施した君主であった。杜甫の現存するすべての詩篇、すべての文章において、玄宗と楊貴妃の事跡を諷諭したらしい句は見出せるが、武后を誹つたと見られる表現を見付けることは困難である。

ところで、唐朝において、彼の時期までに武后という存在、またそれと関わる人脈がどのような政治的位置にあったか。それを概略してみたい。

陳子昂について考察した第一章第一節でも触れたが、武后はその初期においては、太宗の皇子たちを圧倒する気迫と政治的手腕、それに何よりも北方騎馬民族の流れを受け継いだ果敢な行動力と貴族化しない野性的魅力<sup>(8)</sup>を有していた。しかしながら、権謀を用いて皇后となり、懦弱な高宗の權威をも忽ちに凌駕してくると、様々な抵抗と摩擦<sup>(9)</sup>が起り、それら反対勢力を倒すこと以外には自らの存在を維持できなくなる場合に直面することとなる。宮崎市定氏の言葉<sup>(9)</sup>を借りれば、

中世の社会には対話がない。妥協も知らぬ。ただ食うか食われるかの闘争あるのみである。そこでたとえ自己の兄弟であつても、従兄弟であつても、少しでも自己に対立し競争の立場に立った者には容赦なく攻撃を加えねばならぬ。

かくして、皇后王氏を追い落すことから始まり、長孫無忌はじめ創業の功臣、さらに皇室李氏および外戚、果ては実子の李弘まで、ありとあらゆる政敵を殺戮し続けた。歴史上武后の評判が頗る悪いのも、こうした無慈悲な弾圧の陰惨さが大いに資している。しかしながら、皮肉なことに、この武后の荒つばい肅清によって、

武后が現れなかつたら高宗を中心にして頽唐して行つたであろう皇室李氏内部および有力な旧勢力が一掃され、玄宗の即位によつて唐朝と律令制の政治体制が大きく花開く下地が作られたのである。武后が即位する際、および周朝を宣言した際には、のちの時代からは想像もつかぬほど、人々の要請と祝頌の辞が奉られたが、それらの人士の多くは旧勢力の重臣の下にあつた新興士人であつた。

そして、この政治的状況は文学の場においても相即した現象を齎らした。つまり、武後に仕えた陳子昂、宋之問はじめ、徐敬業に左袒した駱賓王など所謂「四傑」のように「浮躁淺露」の語をもつて評される文学者は、いずれも太宗期の文学を担つた上層貴族ではなく、そろつて新興士大夫層の人物であり、それでこそ詩壇の革新もなされた訳である。

杜甫の祖父審言も、これらの文学者の一人であつた。武後に召し出され、「お前うれしいか」と尋ねられた審言が「跳舞して謝した」という逸話<sup>①</sup>は有名であるが、拾遺の職にあつてしばしば武後に直諫した陳子昂のような政治的な見識はなく、むしろ彼を陥れんとした周季重を十三才になる子の并（杜甫からすれば叔父に当たるが）が酒席で刺殺した逸話<sup>②</sup>などは、仁侠の徒を思わせる一面さえある。

このように、杜甫の祖父審言が朝廷で活躍の場を与えられたのは、偏に武後の恩寵によるものであり、そしてまた、「盛唐の気風」を拓いたとされる陳子昂も、審言と深い関わりをもつ人物であつて、杜甫がその故郷をわざわざ訪れて感慨を催したのも無理からぬ理由がある。そして、杜甫にとって、そのような武后期の朝廷の詩壇こそ、彼が恐らくは幼児から聞かされ学んで来た「心の故里」であつたに違いない。

## 四

ところで、唐朝廷内における武后と武后的なものの立場はどのように変遷したのであろうか。

神龍元年（七〇五年）太子李顥（中宗）を擁した張東之らが、あの李世民が兄建成らを殺した玄武門から入り、武後の嬖臣張易之・張昌宗らを誅殺し、中宗が即位することによって二十年に及ぶ武後の政權は終りを告げるのであるが、中宗自身武後の実子であり、朝廷から排除されたのは、極く少数であつて、武后自身も、「則天大聖皇帝」と称されて上陽宮に徙され、權柄を失つたものの抹殺されることはなかつた。そのみならず、武后のもとで權勢を振つた武三思は、中宗が唐宗室の被弾圧者の復權をいつたのちも暫くの間、中宗の皇后たる韋后を通じて勢力を得たし、韋后自身やがて中宗を毒殺し、幼少の殤帝を擁せんとして、玄武門から突入した臨淄王李隆基（玄宗）に誅殺されるが、以後睿宗のもとで權力を貯えていったのは、武後の娘たる太平公主であつた。彼女は權力については、母親ゆずりの俊敏沈着さを有し、張東之によるクーデターの折にも手を借し、また李隆基が韋后を誅殺した際も功があつた。そして、まもなく太子となつた李隆基の勢力を畏れて、これを排除せんとするに至つた。その結果、睿宗が位を太子に譲り、李隆基が帝位に即くと再び政争が起り、開元元年（七一三年）六月玄宗自ら兵を率いて太平公主一派を誅殺し、公主に死を賜わり結着をつけるのだが、この時活躍したのが、前述の郭元振であつた。

ここに至るまでの間、中宗期睿宗期を通じて、主として太平公主の威勢で幾度も則天武后に尊号が追与されて来た。玄宗が即位した年の八月にも、「聖帝天后」の名を迫諡している。

こうして見てみると、武后の高宗傀儡化に始つた唐室の「女權革命」ともいふべき状態は三十年ほどの時代

の幕が、玄宗その人によって閉じられたことになる。

聡明な玄宗は、皇后や公主という女性の手に権力が集中することが、如何に中世的な帝国たる唐朝を危くするか、骨の髄まで理解していたに違いない。彼は、太平公主の勢力を一掃すると、いわば「非武后化」とも称すべき一連の措置を行っている。例えば、開元五年（七一七年）、則天武后の立てた明堂を改めて乾元殿とし、中書省門下省を旧名に復して貞觀の昔に戻し、諫官・史官が政を匡し記録する制度を復活させている。つまり、武后「革命政權」以来の皇后・公主による側近政治を改め、皇帝と官僚による本来の形に戻した訳である。

さらにまた、開元元年（七一三年）三月玄宗は皇后王氏に親蠶の礼を行なわしめている。小さな事のように見えるが、武后以来の「女權」を排し、皇后本来の在り様をこの儀礼でもって朝廷内外に示したもので、政治的意義は大きなものがあつた。<sup>13</sup>

そして、「非武后化」の最終段階は、玄宗が武惠妃を皇后に立てようとした際、或る人が「武氏は乃ち不戴天の仇、あに以て国母となすべけんや」と進言した事である。結局、武後の従父兄の子武攸止の女である武惠妃は皇后待遇のまま、<sup>14</sup> 壽王瑁らを生んで開元二十五年（七三七年）薨するのであるが、「不戴天の仇」という強い反撥の態度は、玄宗自らが敷いた路線を以て臣下が玄宗の私情に規制を行ったものと見ることが出来る。のちに壽王の妃が楊貴妃として玄宗を惑わせることになるのは歴史の皮肉であるが、この時点において武后とその後の武后的なるものの亡霊が、「非武后化」をなし遂げて総てに自信を持っていたであろう玄宗自身をも拘束することとなつたわけである。それにしても、「不戴天」の言葉を用いる宮廷の雰囲気は、杜甫の命運を考察する場合、取り分けて重要であると言えよう。

## 五

以上のような唐朝廷内部における則天武后とその影を見てくると、前掲の天寶九載に玄宗に上られた「進鵬賦表」が朝廷と玄宗の目にどのように映ったか推測できる。流石に武后の名は出さず中宗の朝を語っているが、祖父蕃言の文才と己れの不遇を不当視する杜甫の言辞は、明らかに、玄宗および廷臣をして快からしめるものではなかった。逆に「臣之近代陵夷、公侯之貴磨滅」という冒頭の句は、恐らく彼らの神経を逆撫するものであったに違いない。

右の上表文が、杜甫の前期における立場をもっとも雄弁に物語るのに対し、大曆二年に作られた「寄狄明府博濟」の雜言古詩は、後期における最も明瞭な言辞であると言える。その詩は、明の黃鶴によれば大曆二年（七六七年）に作られたもので、巴蜀のどこかの県令（明府は県令の異称）をしていた狄博濟なる人物に寄せられたものであるが、冒頭次のようにいう。

梁公會孫我姨弟 梁公の曾孫 我が姨弟

不見十年官濟濟 見ず十年官の濟濟たるを

大賢之後竟陵遲 大賢の後 つひに陵遲

蕩浩古今一體 蕩浩 古今 同じく一体

最初の句で、杜甫は自分が、武后を支えた名宰相狄仁傑の曾孫狄博濟と母方の従兄に当ることを明記し、続けてその零落を嘆いている。杜甫は狄博濟より年長であり、君側に仕えたという経験をふまえてか、遠慮のな



い、むしろ頭ごなしのもの言い、更に次のようにいう。

汝門請從曾翁說 汝が門請う曾翁より説かん

太后當朝多巧詆 太后朝に当り巧詆多し

狄公執政在末年 狄公政を執り末年に在りて

濁河終不汚清濟 濁河つひに清濟を汚さず

“おまえの家を曾祖父から述べてみよう。武后が朝廷に君臨された折、巧みな言辞で悪くいう者どもが多かったが、狄仁傑様はその政務を最後まで執られて、濁った黄河の水を清水に入れて汚すことはなさらなかった。”  
右の四句にはこれまで見て来たどの作品におけるよりも、一種の“身内意識”をもってその心情が赤裸裸と言つてもよいほど率直に吐露されている。

杜甫はまたいう、

禁中決策請房陵 禁中策を決して房陵を請ひ

前朝長老皆流涕 前朝の長老 みな流涕す

太宗社稷一朝正 太宗の社稷 一朝正され

漢官威儀重昭洗 漢官の威儀 重ねて昭洗す

“宮中は房州の廬陵王（中宗李顕）に即位を請い、先の朝廷の長老は涙を流して喜こんだ。かくして太宗の社稷は一朝に回復し、漢官（本朝）の威儀は再び耀やき改められた。”

この四句に杜甫の政治的立場が集約されている。つまり、武后という君主が、初期において太宗の政の後継と目されて権柄を得るものの、外戚として権力が増大すればするほど唐室李氏の大多数と敵対し、結果として

多くの肅清に次ぐ肅清ののち、我が子李顕のもとに政権を還さざるを得なかつた根元的な矛盾と、武后その人の、革新を目指しながら必然的に暴君化した為人を、杜甫は一切君側の所為と見なし、狄仁傑がそれを防ぐ高潔なる臣であり続けたため、太宗の朝を復権させることが出来たと見る。そこに欠落しているのは、武后政権が基本的には唐室から禅讓された訳でもなく、全くの自立政権、いわば革命政権であつて、唐室とそれに連なる陣営からすれば「悪虐非道な謀反政権」として捉えられるという認識である。そして、さらに悲劇的なことは、杜甫がそれを認識しないまま、あの「進鵬賦表」を玄宗に奉り、以後も同じような意識のまま肅宗に仕え、先に考察した玄宗朝における「非武后化」の波を認知しなかつたのみならず、生涯玄宗という帝王を思慕し続けた点である。それは恐らく、祖父審言が武后のみに仕して没し、父杜閑はじめ一族が朝廷内部に入ることが出来なかつたため、その事情に疎かつたのが最大の原因であろう。

かくして杜甫は、祖父審言の栄光を背に負つて、武后朝に対して生涯その「毒」を感じ取ることなく、陳子昂・郭元振・閻丘均・狄仁傑など武后にゆかりの人脈を憚ることなく賛美し、その子孫と交わり、姻籍関係を確認しあつている。それが彼の官界つまり文壇における地位を決定的に不利にしていると思うのだが、杜甫自身それを自覚している様子は少しも伺えない。ただ、唐代においてそのような鈍感さが、本人に何の自覚をも及ぼさなかつたかという点、恐らくそうではないであろう。唐朝に仕えることを必死になつて求めつつも、そこから齎らされる冷たい対応を、杜甫は原因がどこにあるのか判らぬまま、ひたすら玄宗を中心とする皇帝への賛美と思慕と追憶の中に、詩句を連ねていった。無論それは「赤心」と呼んでよいものであるのだろうが、後世「詩聖」と呼ばれ、「忠君」をもつて称される詩人杜甫の内部には、そのような悲劇的な誤解と無自覚とが、過去の栄光と己れの文才とともに詩人を板挟みにし、引き裂いていたのである。そこにこそ杜甫の文学の

人間的な深みがあると思われるのだが、複雑に屈折する彼の詩空間は、その間にゆらぐものであるとも言えよう。

「寄狄明府博濟」の詩で杜甫は、「胡為れぞ岷漢の間に瓢泊して、王侯に干謁して頗る歴抵するや」と、狄仁傑の曾孫が地方まわりの小官に甘んずるのを叱している。しかしながら、あの郭元振も玄宗御幸の際に軍樂が止ったという妙な理由で、死罪に処せられんとするところを減ぜられて流謫の途上に突然没しているし、閻丘均の孫は蜀で僧としてひっそりと暮らしていた。彼らは恐らく、玄宗朝以後の自己の危さを知って身を潜めた。杜甫とは別の意味で、身の危うさを知らずに朝廷に頭たらしとした郭元振は不可解な最後を遂げているゆえ、杜甫に対して狄博濟がどのような言葉を返したか想像に余りある。あるいはその言葉が、大曆初にあれほど「天子」「至尊」「先帝」などの言葉を多く詩中に重ねさせた理由の一つであるのかも知れない。

### おわりに

唐の詩人にとって、則天武后は大きな影を投げかけているものと思われる。右に見た杜甫のほかにも、幾人かにその影響の可能性を見ることが出来る。

一例を挙げるなら中唐の詩人李賀である。彼は、その詩の中で「隴西の長吉推類の客、酒闌にして感覺す中区は窄せましと」(宴罷張大徹索贈時張初効潞幕)と、唐室李氏と同じ隴西李氏を誇示する。そして、史書の記載では、その系は鄭王に出ているが、この鄭王とは大鄭王李神通(？—六三〇年)のことで、高祖李淵とは従兄弟、したがって太宗李世民の叔父にあたる。そして、その李神通の子、李孝逸の三代目ほどの子孫が李賀の父

李晋肃である。この李孝逸なる人物は、李賀の家系を論ずる際に、常に名前が引きあいに出されるが、実は、『唐書』宗室傳に記される如く、則天武后の専横の時期において積極的に武后に加担し、徐敬業の反乱の際には左玉鈐衛大將軍揚州行軍大総管として平定にあたり、のちその功により呉国公に封ぜられた人物である。そのため武承嗣にねたまれて讓言せられ、流謫地で没して、以後「宰相世系表」に子孫の名はない。睿宗の景雲初年に金州大都督を追贈されているが、皇室李氏とりわけて前述のような非武后化を遂行していった玄宗以後の唐室内部からすれば、傍系李氏ということもあり、危険視されていたであろうことは推測に難くない。

周知のように、李賀は河南令の韓愈に若くして詩才を見出され、河南府試の貢舉から都長安に上ったところで、父親晋肃の諱が「進士科」の名称に触れることを理由に受験辞退を強要される。所謂「諱禍」事件であるが、この背後にあるのは、晩唐期における党争の前兆現象や、或は韓愈への政治的策謀などではなく、「隴西李氏」を名乗った李孝逸の子孫に対する唐室内部もしくはそれを顧慮する宮廷内部の厳しい拒絶の姿勢であったと考えるのが妥当であろう。

因みに、杜甫は最晩年の大暦三年（七六八年）に公安（湖北省江陵）で李賀の父晋肃に逢い、「公安送李二十九弟晋肃入蜀余下沔鄂」の詩を作っている。杜甫と李晋肃とは、姻籍関係があったことになり、李賀の詩が杜甫の作品の影響下にあること、これまでの諸家の指摘するとおりである。「少くして学を好み、頗る文を属せり」と史書の記す李孝逸の子孫が、憲宗朝の元和年間にそのような理由で官僚への道を閉ざされているとしたら、杜甫が肅宗朝においてどのような目で見られていたかも、逆に推察できるといえるものである。

以上のような経緯からすると、もうひとり「隴西の李氏」を称した詩人、李白についても同様な疑念が介在しうる。今日、李白の出自については、異民族説を含めて諸説紛紛だが、通説は李陽冰「草堂集序」および范

伝正「李公新墓碑」が基礎となっているが、二文に共通するのは、

- (1) 隴西成紀の人であること。
- (2) 李嵩九世の孫であること。
- (3) 隋末（李序は「中葉」）に西域に流謫されたこと。
- (4) 姓を変えていたこと。
- (5) 神龍初に唐土（李序は「蜀」）に戻ったこと。

などである。恐らく、これらの記事の出処は李白自身であろうが、疑問の余地なしとしない。右により立証せんとするところが、唐初より中宗によって唐朝が武后から回復される神龍初年まで李白の家系の唐土からの「アリバイ」だからである。玄宗に供奉として仕え、僅かの期間で免ぜられたのは、通説では高力士の讒言によるとされるが、杜甫や李賀の場合と似た事情が介在するように思えてならない。

さらに、牛李の党争の影響とされる李商隱の不遇も、「李賀小傳」を書き、姻籍面でもつながりがあるらしい晩唐の詩人に、その祖の関わりが、可能性の問題として考えられないことはない。

逆に、前論<sup>(19)</sup>で論じたごとく白居易の祖の一たる白大威が梓州刺史として陳子昂殺害に関与している可能性と、その子孫が李賀と同じ憲宗期唐朝において破格の抜擢と活躍を見せる背景にも、武后朝という「革命政権」への対処のあり方が、その子孫たる文学者たちにのちのちまで影響を与えている、「見えざる力」を感じざるを得ないのである。陳子昂、李白、杜甫、白居易、李賀、李商隱といった唐代文学を代表する人々が、その影響を受けているとするならば、各詩人の作品の読み取り方も根本的な再検討が必要となろう。

## 注

- (1) 「予之所羨者、蓋以先生一飯之頃、忠君愛國之惓惓、雖其出巫峽、下湘川、固不戀於此、先生之精神、猶水之在地、無所往而不在焉。」(朱椿「祭杜子美文」)
- (2) 「若夫發於情、止於忠孝者、其詩豈可同日而語哉。古今詩人衆矣、而杜子美爲首。豈非以其流落飢寒、終身不用、而一飯未嘗忘君也歟。」(「東坡集」卷二十四)
- (3) 「孟子曰一伯夷、聖之清者也、一孔子、聖之時者也。孔子之謂集大成。嗚呼、杜氏、韓氏、亦集詩文之大成者歟。」(『淮海集』卷二十二)
- (4) 『古典文學研究資料彙編杜甫卷上編』に収めるが、この書の編者も、「決非退之所作也明矣。」と断じている。
- (5) 「王維證時符水月、杜甫狂處遺天地。」(楊巨源「贈從弟茂卿」)
- (6) 「祭遠祖當陽君文」によって杜甫はその徳を顕彰している。
- (7) 宋の計有功『唐詩記事』卷六は杜甫のこの詩を引き、「謂審言以詩、閻丘以筆(原文は字)、同侍武后也。」という。閻丘均は益州成都の人で、のち安樂公主に見出され太常博士に至ったが、公主が誅されると貶せられた。このことは『舊唐書』卷一九〇陳子昂傳に見えるから、陳子昂・杜審言・閻丘均という人脈には強い絆があったものと思われる。
- (8) 第一章第一節九頁にも引いた吉頊を一呵した故事(『資治通鑑』唐紀三久視元年条)などにも、北方騎馬民族の血が強烈に感得される。
- (9) 宮崎市定氏『大唐帝國』(『宮崎市定全集』第八卷二七七頁初出)河出書房 一九六八年)
- (10) 『舊唐書』卷一九〇上の王勃の伝に見える言葉。
- (11) 『新唐書』卷二〇一所収の杜審言の伝に見えるほか『唐記紀事』卷六にも載せる。  
後武后召審言、將用之、問曰「卿喜否。」審言蹈舞謝。
- (12) 同前
- (13) 司馬周季重司戸郭若訥構其罪繫獄、將殺之。季重等酒酣、審言子并年十三、袖刃刺季重於坐、左右殺并。  
『資治通鑑』唐紀二六開元元年三月辛巳の条に、「皇后親蠶」とあり、胡三省は注に『太上皇録』を引き、「三月

辛巳、皇后親蠶、自嗣聖・光宅以來、廢闕此禮、至是重行。」という。なお、新城理惠氏「先蠶儀禮と唐代の皇后」(『史論』46)には、武后が中宗を廢するまではこの儀禮を熱心に行うが、武周革命のち中断、玄宗が再開するまで行われなかった実態が詳しく論じられている。

(14) 『資治通鑑』唐紀一九開元十四年条。

上欲以武惠妃爲皇后、或上言、武氏乃不戴天之讎、豈可以爲國母。

(15) 『舊唐書』などは「玄宗貞順皇后武氏」と記す。

(16) 『新唐書』卷二〇三李賀傳

(17) 『新唐書』卷七八宗室梁郡公孝逸傳

徐敬業稱兵、以孝逸爲左玉鈐衛大將軍、揚州行軍大總管、帥師南討。

(18) 同前

孝逸、少好學、頗屬文。

(19) 第一章第一節十九頁參照

## 第四節 杜甫「登高」詩の問題点

### はじめに

七言律詩は、いわば近体詩の華であつて、詩というジャンルの究極のスタイルであるといえる。その七律の形式を完成させたのは、杜甫である。彼はその生涯の前半期には、主として五言なかんづく古詩の制作に力点を置いていた。ところが、長安を離れて流浪の生活に入つてからは、詩作の中心が七律へと移行する。その原因は、恐らく杜甫自身の詩制作意識の変化、想定する読者の変化によるのであろう。つまり、華州時代までの杜甫は、あくまで唐朝の官僚の一員として、或いはその一員となるべき士人として、基本的には当路の人々を読者に想定して詩を作っていた。しかし、現実の唐朝に左拾遺として出仕し、自身の誠実さが官僚としての保身の術と相容れないものであることを身をもって味わたつたのちの杜甫は、唐朝に対する「赤心」を保ちつつ、都長安を後にして秦州に移り、離群の人として自己を措定する。秦州時代以後急に多作される七律を中心とする所謂「借題」(第一句冒頭の語をもつて篇題とする)の詩の存在は、その想定される読者が不特定であることを意味している。成都時代を中心にして、社交の詩もその後作られてはいるが、杜甫後半期の七律は、つねに「自らの生きる証し」として、或は「百代の後に託す」気概が込められていると言つてよいであらう。



杜甫後半期の代表作たる七律「登高」（一部のテキストでは「九日」）一詩は、すぐれて人口に膾炙した作である。宋代の詩話などに言及されることも多く、明の胡應麟は、「古今七律の第一」とまで称し、明の李攀龍『唐詩選』や蘅塘退士『唐詩三百首』といった通俗選本にも収められて、人々の脳裏に深く刻まれた名作である。

風急天高猿嘯哀 風急に天高く猿の嘯くこと哀し

渚清沙白鳥飛廻 渚清く沙白く鳥飛びめぐる

無邊落木蕭蕭下 無辺の落木 蕭蕭として下り

不盡長江滾滾來 不尽の長江 滾滾として來たる

萬里悲秋常作客 万里悲秋つねに客となり

百年多病獨登臺 百年多病ひとり台に登る

艱難苦恨繁霜鬢 艱難はなはだ恨む繁霜の鬢

潦倒新亭濁酒杯 潦倒新たにとどむ濁酒の杯

宋の王洙がその注<sup>2</sup>で示しているように、「天高」「蕭蕭」「悲秋」など『楚辭』に由来する語を多く鏤めていて、作者が流浪の身を古典の悲劇のひとつになぞらえていることは明らかである。正しく『楚辭』を起源とする「感傷文学」の系譜に連なるもの<sup>3</sup>として考えてよいであろう。それが、漢魏詩たとえば「古詩十九首」や曹植

の文学と異なり、或る意味では本家の『楚辭』に近い表現の鮮烈さを読む人に感じさせ、かつまた強くリアリティを讀者に齎らすのは、何よりも七言律詩という形式の成熟の資するところ大であると言わなければならぬ。清朝の沈德潜は『唐詩別裁集』（卷十三）に収めるこの詩の第一句に評して「一句の中 三層」として、第三・四句に「好は『無辺』『不尽』『万里』『百年』に在り」といい、第五句に「亦た一句三層」という。さらに、近人夏松涼氏の言葉借りれば、「二三兩句は呼応して、いずれも山の景を述べ、二四兩句も呼応して、おなじく江の景をのべている。そして叙景の中に、音（風の音、猿の聲）があり、色彩（沙の白、渚の青）があり、動（鳥の飛翔、落葉）があり、静（沙、渚）がある。」

表現の連関は右にとどまることなく、八句それぞれの内部や四聯相互の間に、叙景と抒情の呼応や実辞と虚辞および助辞の變化等々、細かく分析すれば際限もないほど数えあげられる修辭の妙は、まるで複雑なフーガを聴くが如く、五十六文字で形成するブリリアントカットの宝石の如く鑑賞者を憑きつけてやまない。流離の感傷と、推移の悲哀という伝統的なモチーフは、七言律詩という形式の豊饒な表現力と短詩形の象徴力とを極限まで機能させることによって、それまでの標準的な表現形式であった五言詩では到達しえなかつた精緻で広大な詩的世界を構築しているのである。

ところで、韻律を担う平仄式に関して言えば、近体詩七言のそれは五言詩のもつ五音節の上に二音節を加えた形となる。つまり、五言仄起の「●●○○○」あるいは、五言平起の「○○○○●●●○○」に二字ずつを加えた「○○○○●●●○○○○」(七言平起) および「○○○○●●●○○○○●●●○○○○」(七言仄起) を基本とする。実際の制作に当っては、七言詩は七言詩として発想され、五言詩は五言詩として作られるから、いわば全く別の世界であるのだが、時としてその二つの世界が交錯することがある。

例えば、北宋の王直方は次のようにいう。

舊以王維有詩名、而好取人章句、如「行到水窮處 坐看雲起時」、乃英華集詩也。「漠漠水田飛白鷺 陰陰夏木囀黃鸝」、乃李嘉祐詩也。余以爲有摩詰之才則可。不然、是剽竊之雄耳。<sup>5)</sup>

ここで王直方は単に、王維の「終南別業」(唐殷璠『河嶽英靈集』では「入山寄城中故人」)の詩、および「積雨輞川莊作」の詩における句が他人からの借用であると指摘しているに過ぎない。ところが、彼とほぼ同時代人で、十年ほど後輩にあたる葉夢得は、その著『石林詩話』(卷上)において、後者の七律が李嘉祐の五言詩句に二字ずつを加えたものであると説く。

詩下雙字極難、須使七言五言之間除去五字三字外、精神興致、全見於兩言、方爲工妙。唐人記「水田飛白鷺 夏木囀黃鸝」爲李嘉祐詩、王摩詰竊取之、非也。此兩句好處、正在添漠漠陰陰四字、此乃摩詰爲嘉祐點化、以自見其妙、如李光弼將郭子儀軍、一號令之、精彩數倍。不然、如嘉祐本句、但是詠景耳、人皆可到。<sup>6)</sup>

ここで「唐人」と葉夢得が呼んでいるのは『國史補』(『說郛』卷七十五所収)の著者李肇のことである。<sup>7)</sup>右の文に見える李嘉祐の五言二句は現存する彼の詩集二巻には見えないが、<sup>8)</sup>彼は天寶七載の進士である。この詩人の句を王維が借用して七言としたという話は、従って李肇の記述を信するよりほかはないのだが、宋代以後それを前提として論ぜられるため、ひとまずそれに従うこととする。

ところで葉夢得は右の文に続けて言う。

要之當令如老杜「無邊落木蕭蕭下 不盡長江滾滾來」、與「江天漠漠鳥雙去、風雨時時龍一吟」等、乃爲超絶。

ここで葉夢得が問題にしているのは、「漠漠」「陰陰」「蕭蕭」「滾滾」のような疊字の用い方が、七言詩では

その生命を制するほど難しいということであり、杜甫と王維の成功例でそれを示す。そして、前掲の前半では王維の句について、李嘉祐詩の平凡な二句が疊字をたくみに加えることで優れた七言に転じたものと賛えているのである。

南宋のひと葛立方は、右の葉夢得の語に賛同を示しつつ、黄山谷と白樂天の詩句に言を進める。

「水田飛白鷺 夏木嘯黃鸝」李嘉祐詩也。王摩詰衍之爲七言曰「漠漠水田飛白鷺、陰陰夏木嘯黃鸝」而興益遠。「九天闔闔開宮殿、萬國衣冠拜冕旒」王摩詰詩也。杜子美刪之爲五言句、「閭闔開黃道、衣冠拜紫宸」而語益工。近觀山谷黔南十絶、七篇全用樂天「花下對酒」、「渭川舊居」、「東城尋春」、「西樓委順竹窗」等詩、餘三篇用其詩略點化而已。(中略)葉少蘊(夢得)云「詩人點化前作、正如李光弼將郭子儀之軍、重徑號令、精彩數倍。」今觀三公所作、此語殆誠然也。

葛立方はここで、黄山谷の換骨奪胎ぶりの見事さ(例は省略した)を示すことを目的としながら、五言と七言の交錯について、王維と杜甫とを引き合いに出して論じている。「九天」の二句は、王維「和賈舍人早朝大明宮之作」七律の領聯であり、また「閭闔」の二句は杜甫の五言排律「太歲日」の第五・六句である。李嘉祐の五言の詩句を王維が七言に仕立てたという「水田」の二句は、宋の詩話に好んで取り上げられている。右のほか、李頎『古今詩話』や李錡『李希聲詩話』(いずれも郭紹虞『宋詩話輯佚』所収)などにも見られるが、南宋の楊萬里の次の所論には杜甫の「登高」詩に対する重要な示唆を含んでいる。

王維詩云「漠漠水田飛白鷺 陰陰夏木嘯黃鸝」二句、以「漠漠」「陰陰」二字、喚起精神。又「無邊落木蕭蕭下 不盡長江袞袞來」二句、亦以「蕭蕭」「袞袞」、喚起精神。若曰「水田飛白鷺 夏木嘯黃鸝」「木葉蕭蕭下 長江不盡來」、則絕無光彩矣。見得連綿不是裝湊贅語。<sup>⑩</sup>

この論は詩人間の換骨奪胎の問題としてではなく、五言と七言の表現の差異の問題として、七言を削って五言とした場合を実験的に試みているのである。そこで、「水田」の二句は李嘉祐の名を省かれているし、杜甫の七言も手が加えられ、「落木」は「木葉」に置き換えられている<sup>11</sup>。詩人楊萬里の視点は、やはり他の「詩話家」の視点とは一味ちがっていると見えよう。ただ、その目差すところは前掲の詩話諸篇と大差はなく、七言における疊語の効用であつて、杜甫「登高」詩の分析にあるのではない。また自ら手を入れて五言化した二句を七言と比べて、原詩の光彩の失せることを証するという、いささか自己撞着的な論法も気にかからないでもない。もつとも、詩話というものは多くそのような「遊び」の要素を必然的に前提とするものであつて、有名な詩人や作品について自論を誇示したり、新発見の事実をさりげなく批歴したり、詩人の優劣を論じたり、前朝と本朝の比較を行なつたり、自由気ままな談論を楽しむものである。それゆえ、胡應麟の次のような論議は、宋の詩話作家たちからすると、気まじめすぎて面白みに欠けるといふことになるかも知れない。

世謂摩詰好用他人詩、如「漠漠水田飛白鷺」、乃李嘉祐語、此極可笑。摩詰盛唐、嘉祐中唐、安得前人預偷來者。此正嘉祐用摩詰詩。宋人習見摩詰、偶讀嘉祐集、得此便爲奇貨、訛謬相承、亡復辯訂。千秋之下、頼予雪冤、摩詰有靈、定當吐氣。<sup>12</sup>

たしかに、王維は開元十九年（七三一年）の進士であり、李嘉祐は天宝七載（七四八年）の進士であるから、かなり王維の方が官僚として先輩になる。だが、李嘉祐の詩句を王維が用いる可能性がまったくありえないと言えるかということになると、明確に断じがたい。そもそも、李肇の『國史補』に録せられた記事を信ずるか否かの問題であるのだから、「摩詰有靈、定當吐氣。」という言葉などは、少しく「思い入れ」の過ぎたものと言わなければならない。つまり胡應麟の『詩藪』一書は、その詩文学史上の見識の高さによって知られるが、そ

れだけに逆に宋代の詩話に見える「遊び」の精神は影をひそめてしまっているわけである。

その胡應麟が、別の箇所、この同じ詩句について極めて鋭い分析と論断を示している。そして、右に見て来た宋人の詩話の「遊び」の半面に潜む、分析や客観的な視点の欠如という弱みを突く重要な指摘を含んでいる。それは、明前半の文壇の大立者李夢陽の何景明に対する発言への批判の議論として提出される。詩話としてはやや長いものとなるが、全文を紹介しておく。

李駁何云「七言律若可翦二字、言何必七也。」此論不起於李、前人三令五申久矣。顧詩家肯綮、全不係此。作詩大法、惟在格律精嚴、詞調穩愜。使句意高遠、縱字字可翦、何害其工。骨體卑陋、雖一字莫移、何補其拙。如老杜「風急天高」、乃唐七言律第一首。今以此例之、即八句無不可翦作五言者。又如「江間波浪兼天湧、塞上風雲接地陰」「五更鼓角聲悲壯、三峽星河影動搖」等句、上二字皆可翦。亦皆杜句最高者、曷嘗坐此減價。又如王維「漠漠水田飛白鷺、陰陰夏木嘯黃鸝」、李嘉祐翦爲「水田飛白鷺、夏木嘯黃鸝」。「九天闔闔開宮殿、萬國衣冠拜冕旒」、老杜翦爲「闔闔開黃道、衣冠拜紫宸」、何害王句之工。即如宋人「爲看竹因來野寺、獨行春偶過溪橋」、上下粘帶、不可動搖、而醜拙愈甚。自詩家有此論、舉世無不謂然、甚矣獨見之寡也。」

胡應麟は先ず李夢陽の「七言律は、もし上二字を切り取りうるならば、どうして七言である必然性があるのか。」という疑問を提示する。そして、そのような議論がすでに昔から幾度となく繰り返されていることを述べる。その例として王維と李嘉祐の詩句の交錯をもち出しているが、これは前述したごとく宋代の詩話の多くに見られるものである。胡應麟は李夢陽の論を形式論として排し、詩はスタイルが整っていて言葉がゆるぎないものであることが肝要であり、詩句の意味するところ深遠なものがあれば、二字を削っても損なわれるとこ

ろはないと説く。右の文において、次の部分は、杜甫の「登高」詩を考える場合示唆的である。

老杜の『風急にして天高く』の如きは、乃ち唐七言律の第一首なり。いま此を以て之に例うれば、即ち八句は翦りて五言と作すべからざるなし。また『江間波浪 天を兼ねて湧き、塞上風雲 地に接して陰し』、『五更の鼓角聲悲壯、三峽の星河 影動搖』などの句、上二字みな翦るべし。またみな杜句の最高の者なり、なんぞかつて此に坐して価を減せんや。」

杜甫の作品中「秋興八首」や「閣夜」も七言の雄篇であるが、「古今七律の第一」と自ら呼ぶ「登高」詩について、「八句はみな上二字を切りとつて五言にできぬものはない」と断じているのである。

つまり、七律「登高」一詩は、その上二字を削つてみると、五言律詩として成立する仕組みになっているのである。

天高猿嘯哀 天高く猿の嘯くこと哀し

沙白鳥飛廻 沙白くして鳥飛びめぐる

落木蕭蕭下 落木 蕭蕭としてくだり

長江滾滾來 長江 滾滾として来たる

悲秋常作客 悲秋 つねに客となり

多病獨登臺 多病 ひとり台に登る

苦恨繁霜鬢 はなはだ恨む繁霜の鬢

新亭濁酒杯 新たにとどむ濁酒の杯

むろん、もとの七律がもつ雄渾華麗な響きはなくなり、五言律詩として必ずしも上乘のものであるとは限ら

ないが、ともかくも五言律詩として成り立ち、見方によっては寂寞感の惻惻として迫る一首とさえ言えるのである。胡應麟自身が、このように一首の五言律詩として読んでみたことがあるか保証の限りではないが、五律として成り立ちうるという可能性は一応示しているとしてよいであろう。

二一

ところで、それではいったい何故に杜甫はこのような工夫を凝らしたのであるうか。そもそも杜甫は、意識的に七言の中に五言を潜ませるという作業を行なったのであろうか。無論、直接それについて答えとなる資料は残されてはいない。しかし、現存する杜甫あるいは唐ひとの七律の名作を見渡しても、この詩のように、ほとんど原詩の内容を変えることなく上二字を取り去って五言律詩となしうるといふ奇抜な仕組みをもつ作品は見当らない。聯の単位ならともかく、全八句に涉つて上二字中に下五字に含まれる述語に対する主語や、下五字中に含まれる語句を支配する否定詞をひとつも含まないという七律作品は、この詩以外に余り無いと言つてよからう。

そして、この「登高」が唐代の数多い七律作品の中でも、ひときわ特異な形態をもつことは広く知られている。即ち、四聯すべてが対句によつて構成されるというのは、他に例を見ないのみならず、たとえば首聯についていえば、その中にさらに所謂「当句対」の要素を含んでいる。胡應麟の引く元人の言葉を借りれば「一篇の中、句句皆律、一句之中、字字皆律」ということになる。つまり、「風急」は「天高」と、「渚清」は「沙白」と対偶を形成する。また、宋の魏慶之は、その著『詩人玉屑』の中で、「首用虚字」の例のひとつに頷聯



「無邊落木蕭蕭下 不盡長江滾滾來」を掲げているが（卷三）、その否定詞はいずれも上二字の中で収束し、下五の語に関わらない。そして「無辺」の語は「落木蕭蕭下」に、「不尽」の語は「長江滾滾來」の下五の中に内在されるイメージを示す語であつて、剪り取られても変らぬ骨格を下五が担う構造となつてゐる。以下の二聯も、數量詞や疊韻語が右と同様な機能を果している。このような特別な措辞と構成は、決して偶然に出来上つたものではなくて、杜甫が意識的に作りあげたものと考えるのが自然である。

詩人杜甫の中に、このような「仕掛け」を意識的に用意する動機があるとすれば、それは何であろうか。ここで想起されるのは、祖父杜審言の文学である。「矜誕」の語をもつて評され、「世に傲るを以て疾まる」と伝えられる武后期の詩人杜審言は、その代表作として称せられる五言律詩「和晉陵陸丞早春遊望」に相当自信をもつていたと思われる。後世、たとえば胡應麟は、初唐の五律のいくつかの作とともにこの詩を、「皆氣象冠裳、句格鴻麗」と評する。近世においては『唐詩選』『唐詩三百首』にやはり選ばれて人口に膾炙した作であるが、この律詩の特異な技法はそれほど知られてゐるわけではない。

獨有宦遊人 ひとり宦遊の人有り

偏驚物候新 ひとへに物候の新たなるに驚く

雲霞出海曙 雲霞 海より出でて曙け

梅柳渡江春 梅柳 江を渡りて春なり

淑氣催黃鳥 淑氣 黃鳥をうながし

晴光轉綠蘋 晴光 綠蘋に転ず

忽聞歌古調 忽ち古調を歌ふを聞けば



兄」と言うことからして、彼の詩法はやはり家学として伝えられたものだ。」と言うのである。明末清初のひと周亮工は、『因樹屋書影』（巻十）の中で、祖孫の詩句の関わりを指摘している、

杜審言詩『牽風紫蔓長』子美云『水荇牽風翠帶長』。審言『雲陰送晚雷』子美云『雷聲忽送千峰雨』。審言『鶴子曳童衣』子美云『儒衣山鳥怪』。審言『風光新柳報、宴賞落花催』。子美云『星霜元鳥變、身世白駒催』。皆變幻祖句、非獨剽也。

「登高」詩も長江の流域で望郷の涙にひたる杜甫の胸に去来するのは、或は祖父審言が長江河口の晋陵（現在の上海近郊）で詠じた右の五言律であったかも知れない。二詩に共通するのは、詩作品として一級の出来ばえであるほかに、秘かに用意された「仕掛け」の見事さである。「驚心動魄」の詩文の中に、さらに人知れぬ技法を盛り込むという表現への執着の強さは、正しく「血」の然らしむるところであろう。「贈蜀僧闍丘師兄」の右の詩句には「同年主恩を蒙る」の句が続く。杜甫自身左拾遺として君側に列したことはあるものの、それは詩文を以て時の帝寵を得たのではなかった。則天武后にその文才を認められて奉じた祖父の存在は、彼のつねに意識するところであつたに違いない。

### 三

この「登高」詩を論ずるとき、先にも触れたように、形式上の特異さが際立っていることは多くの論者の言及するところである。七言律詩において四聯すべてを対句で構成するというのは、他に類を見ないと言える。首聯二句をも対にする例は結構存在するが、尾聯まで対偶表現を採用するというのは例外中の例外である。そ

ここで、尾聯の措辭に疑問を投ずる傾向がある。そして末尾第八句について、対偶表現を否定する見方も出て来る。例えば 鄧紹基氏は、近著『杜詩別解』<sup>20</sup>の中で次のごとく言う。

前人説這詩八句皆對、而「新亭」作地名或亭名解、就與上句「苦恨」對仗不工、但尾聯本不必作此要求。而且八句皆對仗、未必是寫律詩的好方法、因為易流于呆板。當很多杜詩注家紛紛贊揚《登高》詩八句皆為對仗時、惟清代的黃生説「結調略須放鬆」、可見他也認為律詩最后一聯工對也不是一種好方法。而把「新亭」理解作地名、那末這箇尾聯確就是「略為放鬆」了。

鄧紹基氏によれば、「新亭」なる語は、杜甫が広徳元年に梓州で作った「隨章留後新亭會送諸君」詩に見える「新しい亭」であるという。たしかに、宋代郭知達の編した『九家注本』において、第八句第四字は「亭」に作っている。「新築された亭」の意だとすれば、「苦恨」という用語との対偶性は解消することになる。鄧氏は、梓州時代の連作「九日」七律一首と同時に作られたものであると結論づけ、「江」の語を「涪江」に比定する。しかしながら、右に見てきたような表現の「異常さ」の事情を考えると、この「登高」一首の結びが対句では「平板に流れる」から、対偶を解消すれば「詩の調子にゆとりができる」として「亭」を名詞とするのを良しとする説には賛同しがたい。そのような感覚は、いわば近世的なものであり、作者杜甫の表現に賭けたデモニツシユなまでの執念は、「結句意盡語竭」(沈徳潜『杜詩偶評』卷四)と評されるほど沈んだ調子とは裏腹に、表現における高度な凝縮と複雑な対応が、尾聯まで継続されていて、詩の調子は最後まで張りつめたものなのである。ともかくも、鄧氏の右の所説でもっとも障害となるのは、第六句で「ひとり台に登る」とあるのに、第八句において「亭」の語を改めて持ち出すことの不自然さである。樓・閣・臺・榭・亭など建築物の呼称は、その形式と条件によって定まっているのだから、第六句の「台」と第八句の「亭」とは別個の建物

としてイメージされることとなり、それでは詩にならない。やはり「亭亭通」として動詞にとる以外にはないといえよう。

それでは、「新たに停む」に本文を定めた場合、その意味するところはどのような事柄をイメージすべきであろうか。従来広く行われているような解釈で果して十全たりうるであろうか。これも検討する余地がありそうである。

こんにち一般的に行なわれている「新停」の解釈は、内外ともに「ちかごろ病気のために酒を飲むのをやめてしまった」あるいは「酒を飲むことをひかえている」とするものである。つまり、「老病」「潦倒」の語との関連から、「飲酒という行為をしなくなった」という意味に解している。この解釈は無論今日に始つたのではなく、宋代の注釈者以来、中国歴代の書においてそのような解が行われて来ていることから当然の帰結にすぎない。旧注の代表的なものを列挙してみれば、次のごとくである。

○「久客於萬里之外、而方獨登臺、以多病之人、而對景悲秋、其惟艱難潦倒甚矣。安得不添白髮而廢酒盃乎。」

(宋趙彥材『趙次公集註杜詩』、元張性『杜律演義』)

○「遠客悲秋而多病、鬢安得不白、加之停飲則愈戚矣。」(明張繩『杜詩本義』)

○「時公以肺病斷飲。」(清朱鶴齡『杜工部詩集』、清楊倫『杜詩鏡銓』)

○「遠客悲秋、又以老病止酒。」(清何焯『義門讀書記』)

○「衰年遠客、潦倒艱難、矧斷杯中、益難爲況。」(清湯啓祚『杜詩箋』)

○「此輟飲獨登之綏慨也。」(清浦起龍『讀杜心解』)

右のごとく、「停」の語をそのまま用いて「停飲」とする注があるほかは、それぞれ「廢酒」「斷飲」「止酒」

「断杯中」「輟飲」の語をもつて解している。これらの解釈が以後の注解に定着してしまったのである。歴代の碩学名家のほぼ一致する解ではあるが、果して「停」という動詞はそのような「廢」「断」「止」「輟」のような動詞によつて置き換えてよいものであろうか。

先ずはじめに考えなければならぬのは、「停」という動詞の字義である。許慎の『説文解字』（卷八）に於ては単に「止也」とのみ訓するが、例えば『廣韻』（下平声十五青韻）では、「息也、定也、止也」とし、同音二十字中には「亭」も含み、これに『釋名』を引いて亭停也、人所停集也」という。『文選』卷二十六に収める謝靈運「始去郡」詩の一句「止監流歸停」に李善は注して「蒼頡篇曰、亭定也、停與亭同、古字通」という。前記鄧氏の所説のように「亭」の字に拘つて「あづまや」の意に解する必要は、これらを見ても決してないのであるが、同時に、「停」の語の意味するところがある程度判断できる。もうひとつ『文選』の例を挙げれば、卷二十八に収める陸機「長歌行」の句「寸陰無停晷 尺波豈徒旋」に注して李善は、「言日無停景、川不旋波。以喻年命流行、曾無止息也。」という。伊藤東涯は、『操觚字訣』（卷七）のなかで、明快に「停ハ、中止也、定於所在也、本亭二作ル、シバラクヤムコト也、アトハトモ角モ、マアマテイフコト也」と釈する。つまり、「停」という言葉は、或る動作なり状態なりが継続されている途中において一時的に中断されることを示すものである。東涯が「アトハトモ角」というごとく、一定の時間中断された行為が、やがてのちに再開される可能性を暗に含む動詞である。それでこそ、歩を進める人が一時その足を息う場所を「亭」というのである。したがつて、第八句「新停」の語を、「廢酒」「断飲」に解することは、明確に誤つていふのであろう。何故なら、それらの言葉には「以後いっさい酒を口にすることをやめてしまふ」という意味が含まれるからである。この解は、おそらく「老病」「潦倒」の語から、意をもつて導き出されたのであろうが、作者杜甫の

言い表わそうとした本意を把握しそこねた解と言わなければならない。

『文選』における「停」の用例は、いずれも車馬や日月の運行に関して用いられるものばかりであり、また、杜甫自身の用例も「登高」以外では概ねそれに準ずる。そこで同時代人の例を調べてみると、たとえば李白の詩作品の中で、「酒」ないし「盃」について「停」の語を用いる例がいくつか存在する。

○「岑夫子 丹丘生 進酒君莫停」(將進酒)

○「停杯投筯不能食 拔劍四顧心茫然」(行路難)

○「青天有月來幾時 我今停盃一問之」(把酒問月)

○「對酒兩不飲 停觴淚盈巾」(門有車馬客行)

以上いずれの例を見ても、決して「廢酒」あるいは「斷飲」に解することは出来ない。「停盃」といい「停觴」といい、みな「飲みかけた杯を一旦とどめる」ことを意味している。「飲む」という行為を一時的に中断する、ということなのである。

以上のことから、「登高」第八句において杜甫が表現しようとした所の本意がどのようなものであったか、ただちに推測がつく。「潦倒新停濁酒杯」とは、重陽の節句にひとり台に登り、酌みかわす親朋もなく、工面した安酒を前にして、せめてそれで憂を霽らそうと杯を口元までもってゆくが、もはや身体が受けつけない。杯をとどめて今まで経験したことのない我が身の衰えに愕然とする、という意味である。

## おわりに

杜甫の律詩は名作「春望」などに例を得ることく、前半における叙景や叙事が、やがて末尾において一身の悲哀へと収斂し、その紋述もするどく具体性を帯びてゆくことが多い。七律「登高」の尾聯も、それまでの雄渾な「楚辭」風の悲愁から一転して、きわめて個人的な事象へと悲哀が転化される。それだけに、「新停」の語は、一詩の「関鍵」と言つてよく、「近ごろ酒をやめた」という曖昧模糊とした解釈では納まり切らない「気合い」を含んだ言葉なのである。

## 注

- (1) 胡應麟『詩藪』内篇卷五近體七言。
- (2) 北宋の王洙『杜工部集』の注は、『分門集註杜工部詩』（四部叢刊所収）等に引く。
- (3) 小川環樹「風と雲―感傷文学の起原―」（『風と雲』朝日新聞社 一九七二年）参照。
- (4) 夏松涼『杜詩鑒賞』（遼寧教育出版社 一九八六年）五三三頁。  
一三兩句相承接、都是写山景、二四兩句相承接、都是写江景。而在写景之中、又有声（風声・猿声）有色（沙白・渚清）、有動（鳥飛・葉落）有靜（沙・渚）。
- (5) 『王直方詩話』（郭紹虞『宋詩話輯佚』所収）
- (6) 宋葉夢得『石林詩話』（清何文煥『歷代詩話』所収）
- (7) 『說郛』卷七十五に引く『國史補』の文は次のとおりである。  
王維好佛、故字摩詰。性致高遠、得宋之間輞川別業。山水絕勝、今清涼寺是也。維有詩名、然好竊取人句、如行到水窮處、坐看雲起時、此英華中詩也。漠漠水田飛白鷺、陰陰夏木嘯黃鸝、此李嘉祐作也。



- (8) 中華書局刊『全唐詩』卷二百七には、李嘉祐詩の末尾に句として「水田飛白鷺 夏木嘯黃鸝」を掲げ、『李肇稱嘉祐而有此句。王右丞取以爲七言。今集中無之。』と注している。
- (9) 宋葛立方『韻語陽秋』(何文煥『歷代詩話』所収)
- (10) 宋楊萬里『誠齋詩話』(元王構『修辭鑑衡』卷一所引)
- (11) 清仇兆鰲は『杜詩詳註』(卷二十)で「原本以『落木蕭蕭下、對『長江滾滾來』、落下二字、似乎犯重。若以木葉對江流、庶免字複。』という。楊萬里の文に意を得ているのであろう。なお「木葉」の語を用いたのは、『楚辭』九歌湘夫人の「嫋嫋兮秋風 洞庭波兮木葉下」にもとづいているのだらう。
- (12) 胡應麟『詩數』内卷五近體中七言
- (13) 同右
- (14) 李夢陽「再與何氏書」(『空同集』卷六十一)に見える。
- (15) 胡應麟『詩數』以篇卷五近體七言。元人の誰なるかは未詳。
- (16) 『新唐書』卷二百一文藝傳
- (17) 胡應麟『詩數』内篇卷四近體上五言
- (18) 郭紹虞『語文通論續編』(商務印書館 一九四九年)所収。この文で郭氏は清の董文煥『聲調四譜圖說』の指摘を示す。
- (19) 丁福保『歷代詩續編』所収
- (20) 鄧紹基『杜詩別解』(中華書局 一九八七年 二二八頁)
- (21) 「止酒」(陶淵明にこの語を篇題とする作がある。)および「輟飲」「停飲」の語も文脈からして「廢酒」と同様の意味であると思われる。